

あれは・・・、忘れもしない平成5年9月11日ステレオサウンド誌の第108号の表紙を見た瞬間に背筋に衝撃が走った。思わず「遂に出たか！」と呻き声を漏らしてしまった。これでも職業上の情報収集能力においては、各方面に張り巡らしたアンテナがあり、内外を問わず先行した情報が耳に入ってくるものだが、これは正に青天の霹靂というべき出会いであった。噂には聞いていたものの、この曲線といい、色合いといい、クローズアップされた姿を見たのは初めてであった。

当時の衝撃に匹敵する驚きと喜びを感じたのが、このMOSQUITO NEOであった。私がスピーカーをデザインしたら、こうなるだろう…ということがズバリ具現化されたようなものである!!

昨日やっとMATRIX REVOLUSIONを自宅で見ることが出来たが、VRDS-NEOのネーミングで私が引用したNEOが今度はスピーカーで登場することになった。

私が輸入元の社長にいつ実物を持ってこられるのか?と聞くと、「明日の午前中に自分が運んできましょう!!」と、おっしゃる。

私はこういうタイプの人、好きですね～(笑) 国内に1セットしかないスピーカーの“NEO”を聴いてみたいという方はぜひご来店くださいませ!!

私のインプレッションは次回ということで、どうぞご期待下さい!!

この輸入元というのはCONEX JAPAN株式会社というハイテク製品を輸入する会社であり、設立は1996年というから結構な実績を残しながら日本で成長を続けているベンチャー企業と言えるだろう。最初に輸入したのはドイツ製のIMS-CS RF Componentsというから、高周波電子パーツと言うことになる。それから三つの大きなプロジェクトでヨーロッパのハイテク企業から電子工学部品や光学製品なども輸入し、防衛産業にも関わる技術的に高度な製品を各種輸入して現在に至っている。

そのCONEX JAPAN株式会社の社長がEric CHARLERY氏であり、日本語ぺらぺらのバイリンガルである。このエリックが先週私に電話でコンタクトしてこられ、今回の“NEO”の日本におけるセールス・パートナーになって欲しいというアポイントがあったものだ。このエリックが実に親しみやすく、昨日の最初の会見からとんとん拍子で話しが進んだものだった。また、ここに来られるまでにはステレオサウンド誌の某評論家氏の紹介があり、こんなスピーカーを取り扱えるのはカワマタさんより他はいないでしょうという推薦のもとに来訪されたと言う。

私の解説で物足りない方はどうぞこちらの[MOSQUITO - HI-FI & HOME CINEMA SYSTEM](http://www.mosquito-groupe.com/) web siteをご覧ください。http://www.mosquito-groupe.com/

2. “NEO” Physical feature

三年間の研究開発で生まれた“NEO”はフランス国内とドイツの一部で販売されているが、アメリカの市場には参入していないと言う。アメリカのハイエンドオーディオ市場に関しては急ぐことなく、日本のマーケティングを先行させようということらしい。そこでマーケティングのプロであるCONEX JAPANのエリックが“NEO”をプロモーションすることになったのである。

“NEO”は横幅が420mm奥行き630mm、高さは1,300mmで重量が70Kgである。
日頃から100キロ以上のスピーカーに慣れている私から見ると扱いやすいサイズと重量である。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/m-neo03.jpg>

NEO 1.2



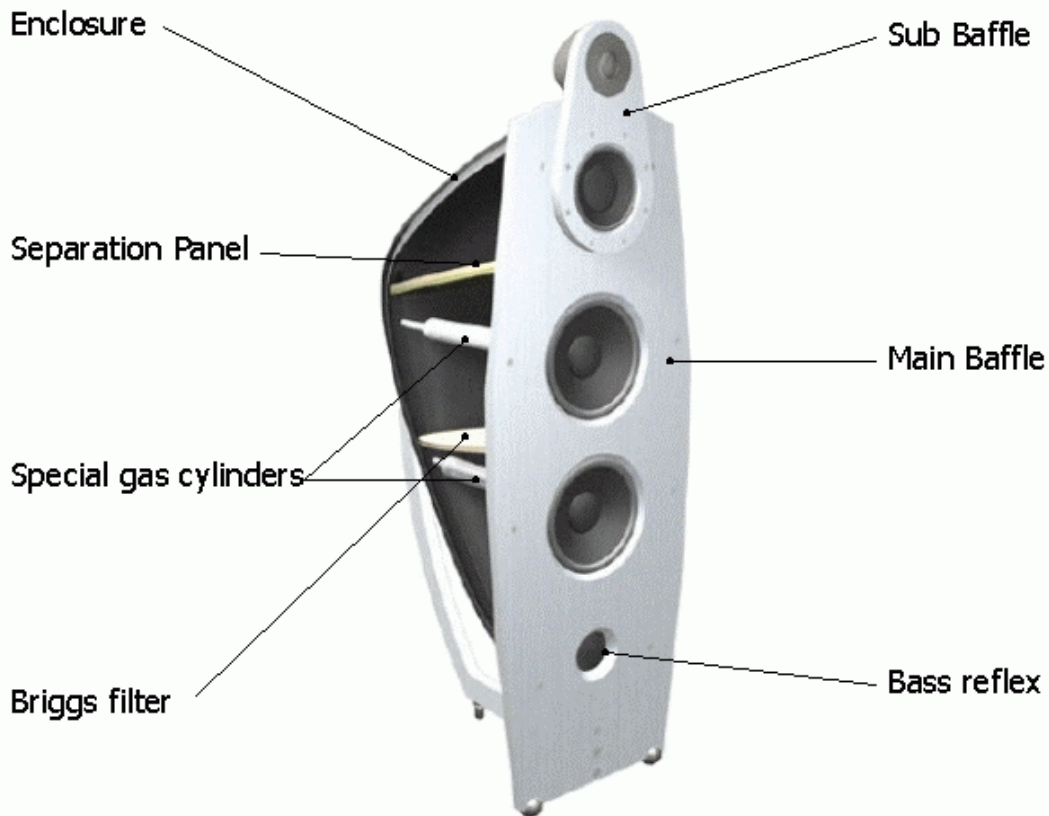
“NEO”のボディーは画像を見てもお解りのように一切の直線がなく、エアロダイナミクス・デザインである。複数の円、ゴールデンレシオ、オジーブ様式を基本としてシンプルで幾何学的な曲線の集合体としてデザインされた。

エンクロージャーはwebを見てもお解りのように、どこにも完全に平行面がないのである。このフォルムもコンピューター・シミュレーションによって音響的な影響を解析して定在波が発生しないように計算されている。

この独特なデザインのボディーは吸音材を注入したアルミハニカムを芯材として、両面をカーボンファイバーとグラスファイバーをエポキシでバインドしたコンポジット素材ではさみサンドイッチ構造としている。その厚みは何と30mmという贅沢なものであり、振動エネルギーを瞬時に減衰させ温度や湿度の影響も受けず理想的なエンクロージャーを形成している。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/m-neo05.gif>

The Technology



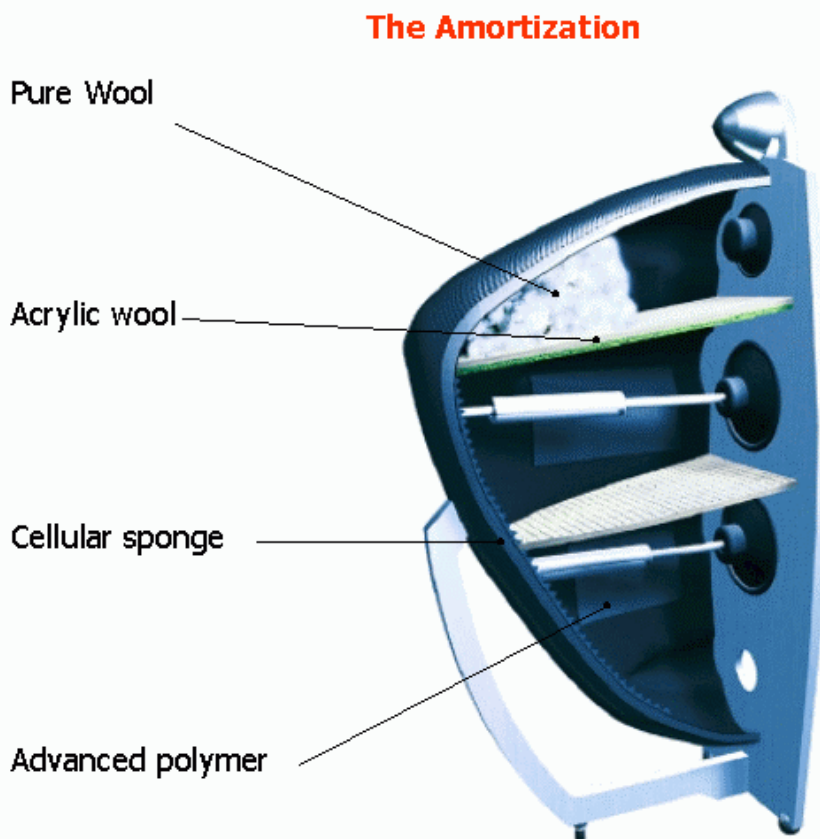
フロントメインバッフルは厚さ 20mm の無垢のアルミからの削り出しである。その上部にサブバッフルが同様の厚さで削り出され 8 本のビスで強固に取り付けられている。トップに位置するトゥイーターはそれとは全く逆にフローティングされており、指でフレームを押してみるとダンパーを介してふわふわと動き浮いているのがわかる。これは賢い設計である。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/m-neo04.gif>

このトゥイーターはフランスの Audax 社のもので、ポリエチレンでコーティングされた 2.5cm ソフトドーム型トゥイーターとなっている。ソフトドームながら高域特性は-3dB で 37KHz まで伸びているので、大変ニュートラルな印象を持つ。

次に厚みが 40mm にも及ぶサブバッフルの下側にマウントされたミッドレンジは Morel-UK から供給される 14cmDPC コーン型ドライバーである。22cm 口径の二個のウーファーも同様に Morel-UK のものであり、これらはネオジウム・マグネットを使用した NeoLin シリーズと称されている。

さて、トゥイーターはフローティング構造であるということを述べているが、それとは対極的なのが二個のウーファーの固定方法である。他のスピーカーのようにウーファーユニットの周囲にあるべきはずの固定用のビスが見当たらないのである。実は、上記の素材による高剛性のエンクロージャーの後方からガスシリンダーのシャフトをウーファーユニットの後部にあてがい、何と 25 キロの応力を加えてフロントバッフルに圧着しているのである。もちろんウーファーの金属製バスケット・フレームが直接フロントバッフルに接しているわけではなく緩衝材をはさんでフローティング構造としているのである。



ガスシリンダーからの圧力がウーファーのフレームからフロントバッフルへと伝えられ、均一に分厚いバッフルに圧着させることでウーファーの発する機械的な振動はエンクロージャーとバッフルの両方向へ伝播し、バッフルの足元にある二個のステンレス球と後方にある1本スパイクによって迅速にメカニカル・アースが取られるのである。

このステンレス球はフロントバッフル下部を削り取った窪みに巧妙にはめ込まれるようになっており、機械的にスピーカー本体にも床面に対してもワンポイントの接点で支持されるようになっている。

とにかく、木のボックスによるエンクロージャーの考え方

とはまったく違い、変調されたエネルギーをスピーカー内部に溜め込んで位相をずらして放出するようなことがないのでメカニカル・ハイスピードという表現で“NEO”のボディーを語りたいものだ。

次に電氣的に各ユニットの使い方を見てみよう。トゥイーターの下側のクロスオーバー周波数は4.2KHzと意外に高いところに設定されている。この口径と同じハードドーム型トゥイーターを使用している他社システムの多くは、大体2KHzから2.7KHzくらいでクロスさせているものが多いのだが、4.2KHz以上を受け持たせるというのは大入力の際の歪み率では大変有利であり、後ほど述べる再生音の特徴にも大いにつながってくるものなのである。

さて、トゥイーターがこのようなゆとりある動作が出来るということに関して実はミッドレンジ・ユニットに秘訣があるのである。下記の随筆は8年前に執筆したものだが…、

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto35.html>

ここで初めてMorelのユニットを搭載したEGGLESTON WORKSのANDRAについて述べているのだが、とにかくMorelのドライバーをミッドレンジに使用するとクロスオーバーはワイドに設定できるものであり、ミッドレンジとトゥイーターのつながりを考慮すると-6dB/octというシンプルな一次フィルターで済むので位相の乱れもなく、音楽の中心となるミッドレンジを生き生きと鳴らすスピーカーシステムを設計しやすくなるのである。

“NEO”のミッドレンジは600Hzから4.2KHzを受け持つバンドパスフィルターで設定されているが、この上下も-6dB/octという緩やかなスロープ特性でつないでいる。ただし、前述のトゥイーター

一の下側スロープは-12dB/oct という特性で、なるべくトウイーターにはミッドレンジの成分を混入させないという配慮が見られる。そして、ウーファークロスオーバーは 600Hz となっており電気的には3ウェイ構成となっている。しかし、ここでもう一つのノウハウが2個のウーファーに生かされているのである。

実は“NEO”を“ウッドレス・スピーカー”と称しながらも、エンクロージャー内部には二枚の仕切り板が組み込まれているのである。これは幾何学的なデザインのボディー内部にしっかりと形状を適応させるための選択であるが、そこにも細かい配慮がなされている。

まず、この二枚の木板はアメリカのスピーカーメーカーが盛んに述べている“ブリージング”と呼ばれているエンクロージャーが呼吸するような微妙な変形を抑制するための補強ではなく、ミッドレンジと二個のウーファークロスオーバーの音響的な作用を作り出すためのものなのである。そのために剛性は求められておらず、二枚の木板の配置も各々縦横に違う角度で取り付けられており平行面をなくすように設定されているのが下記の画像でも観察できるだろう。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/m-neo07.jpg>

そして、このミッドレンジのキャビティを構成する上の木板表面にはアクリルウールが貼り付けられており、ユニット後方へ放射される高域成分を吸収するよう配慮されている。ミッドレンジ後方のキャビティには天然ウールが詰め込まれており、ミッドレンジ・ユニットが後方に放射する 4.2KHz 以上の帯域も自然減衰させるように配慮されている。



次に上側のウーファー後方のキャビティは前述のガスシリンダーのシャフトが中央に位置しているが、吸音材は特に詰め込まれていない。しかし、ウーファー後方のキャビティ内部表面には約 3 センチ厚のウレタンが敷き詰められており、吸音する帯域を中域から低域にまで拡大しながらコンポジット構成のボディーをダンプさせているのである。

また上記の内部の画像からキャビティのセパレーターとして取り付けられた木板に小さい穴が多数開いているのが見受けられる。これは上側のウーファーが後方に放射する 600Hz 以上の中高域成分は上記のように内部壁面のウレタンで吸収させつつ、上部ウーファーのダイヤフラム後方に放射される背圧(バック・プレッシャー)の波長の長い低域成分を下側のキャビティに抜く、いわば空気穴として機能させているのである。

それによって、このように見えないところにノウハウを発揮しながら、上側のウーファー用キャビティはクロスオーバー周波数 600Hz 以上の中高域に対しては密閉型エンクロージャーとして働き、同時に 600Hz 以下の低域方向に対してはエアを抜くことでトランジェント特性を高めているのである。だから、この多数の小さい穴を上部のセパレーターのように吸音材を貼り付けてふさいでしまわないようにしているのである。

次に下側のウーファーだが、これは電気的には上と同様に 600Hz 以下の信号を入力されているのだが、バスレフのポートチューニングが共振周波数 33Hz で設定され、更に低域まで再生帯域をエクステンションさせているのである。能率は 92dB/2.83V/1m、400W の最大入力というパワーハンドリ

ングを可能にして、“NEO”の総合的な再生周波数帯域は-3dBで27Hz～37,000Hz、-2dBでは30Hz～22,000Hzというワイドレンジを確保しており、1KHzにおける歪み率も0.12%というスペックを持っているのである。

最後にカーボン・コンポジット構成のボディーはブラックの他にイエロー、レッド、ブルーと標準色が選択できるほか、有名な高級車であれば、そのカラーコードで好きな色に仕上げることも出来るものだ。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/m-neo01.jpg>



現在はこのカラー仕上げサンプルをメーカーに要望しているところだが、ドイツのショーでMOSQUITOのブースに展示された“NEO”にご注目頂きたい。鮮やかなブルーと一部イエローの背中が見えるのだが、車と同じ塗装工程による仕上げで高級感をかもし出しているものだ。

3. “NEO”のパフォーマンス その1. ベース・コントロール

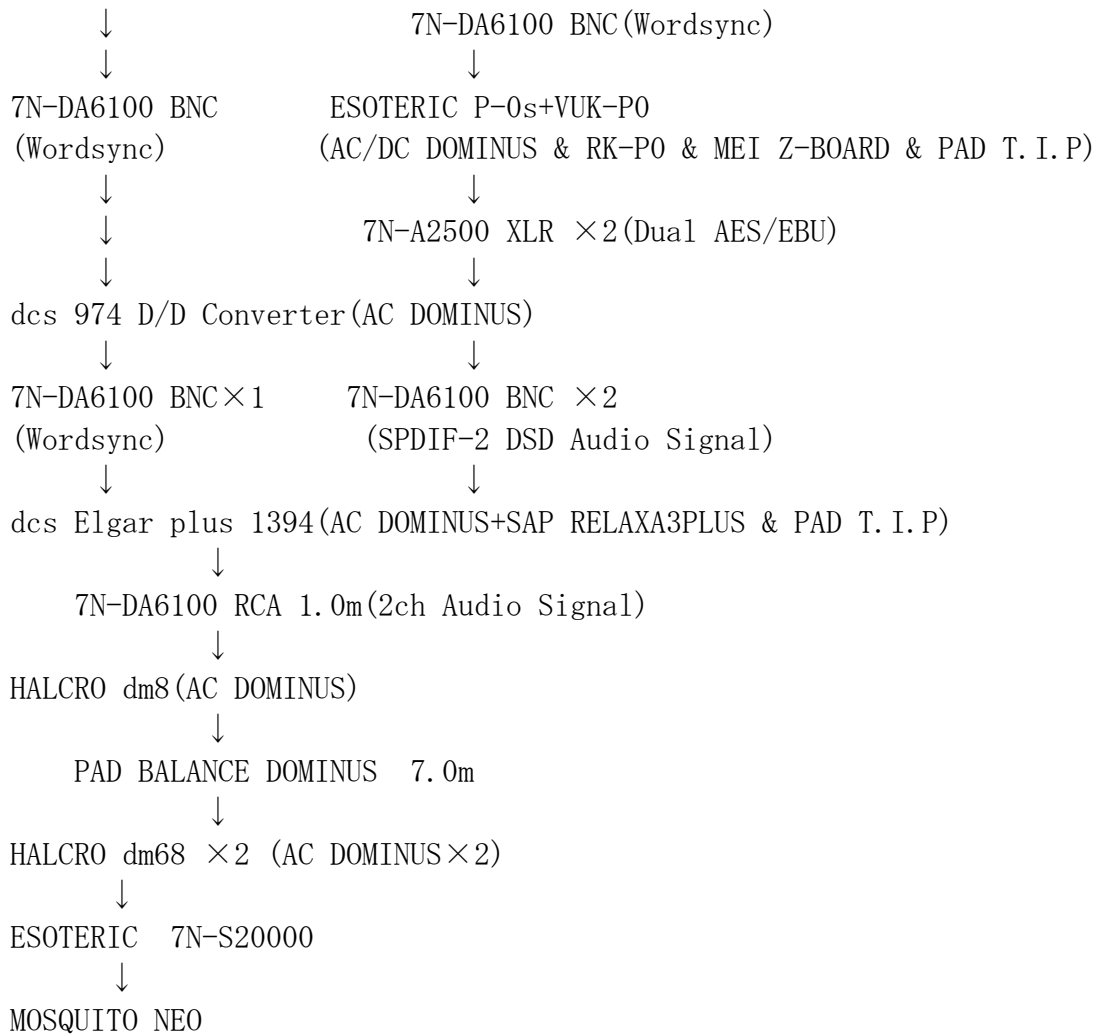
ちょうど“MEXCEL Cable”の評価のために、前回はNautilusを使用していたのでMEXCELスピーカーケーブルを登場させることは出来なかったが、シングルワイヤーで接続する“NEO”については下記のようにいよいよ7N-S20000を使用することになった。ちなみにここに導入した7N-S20000は特注の5.0mなので価格は¥5,840,000という恐ろしい金額になってしまった[^]_^; このケーブルはBi-Wireが出来ないので、同じものをもう1ペア用意したので、結果的には倍のコストがかかっていることになる。

NEOはシングルワイヤーです。上記は他のスピーカーの対応で準備したものです。
一応念のため(^_^)

下記のシステムで本日数時間の試聴を行ったことで、今回ショートエッセイを緊急に執筆しようという気持ちになったのだが、ちょうど本日は時間切れのようである。これから念のために一晩システムエンハンサーをかけて入念にバーンインを行い、明日じっくりと聴き込んでから試聴レポートを作成することにした。

-今回のリファレンスシステム-

ESOTERIC G-0s (AC DOMINUS)
↓ ↓



一月はやい五月晴れ? とも言える快晴の日曜日、夕べの一晚の熟成がどのように音質を研ぎ澄ましたのか期待に胸膨らませて出社した。

最初から大編成というよりは最近聴きなれている曲からということで、押尾コータロー『STARTING POINT』6. Merry Christmas Mr. Lawrence をかけた。http://www.toshiba-emi.co.jp/oshio/

「あら～、この気持ちよさは一体なんなんだ!!」

MEXCEL スピーカーケーブルの貢献ももちろんあるのだろうが、情報量としての余韻感については申し分ない。いや、ひょっとすると私がこれまでに聴いてきたスピーカーの中でもトップクラスかもしれない。

私がセッティングした MOSQUITO NEO の左右のトゥイーター間隔はピッタリ 3メートル、私が試聴しているポジションでトゥイーターの耳の距離は約 3.7メートル。これは私が距離を測りながらセッティングしたわけではなく、この試聴室の音質傾向を知っている私が聴きながら合わせたポジションである。

MOSQUITO NEO のセンターに押尾のギターがピン!!と立ち上がったと思ったら、その両翼に光の尾を引くようにエコー感が拡散していく。のっけから音場感の広さには文句の付けようがないことが瞬間的に理解された。

そして、特筆すべきはギターの質感に刺激成分が皆無であり聴きやすいことだ。この第一印象はこれから述べていく MOSQUITO NEO の総合的なパフォーマンスのおおもとの特徴として最初から感じられたことなのだが、今までテンションがパリパリに張り詰めたガット(弦)をピーン!!と弾いた後にキラキラと輝くように飛散するエコー感とは質感が違うのである。

次に 12. HARD RAIN にスキップした。この曲はギターの本音をヒットしての低域が織り交ぜられ、それが本来のギターの低弦とのリズムと絡み合うように独特の重量感をかもし出しているのだが、この低音階の響きの一部分が取り残されるようにして位相が遅れてしまうと直ちに解像度が低下してしまうというチェックポイントがあるのだ。

しかし、MOSQUITO NEO の低域は早い!!

どの低音も置いていかれるものは一つもなく、全てが一様のスピード感で再現されるので、音像が膨らむということがない。これは凄い!!

では、低域の絶対量と重量感はどうなんだろうか? そこで…。

まずは倍音成分を多く含み、スピーカーシステムの低域再生に関して質感をチェックしやすいウッドベースの録音で早速試して見ることにする。

BRIAN BROMBERG 「WOOD」よりソロのベースで鮮明な録音で以前からテストに多用しているのが 11. Star Spangled Banner、この原題だとわかりにくいのが要するに「星条旗よ永遠なれ」である。さあ、どうなるのか!? <http://www.kingrecords.co.jp/saisin/bass/index.html>

ここで演奏するフロアー型スピーカーでも口径 22 センチというウーファーのものではなく、そんな小さな口径のウーファーがどの程度の重量感を見せるのか? ちょうど B&W の Nautilus802 のウーファーが口径 20 センチなのでいい勝負なのだが…!?

「おお～、これはいい!!」

ベースのソロはスピーカーにとって、位相を遅らせてもキャビネットのサポートを受けて量感を補う性格の低域を付加しているものもあるが、この曲の冒頭の強烈なピッチカートが弾かれた瞬間に私の疑問点は霧散してしまった。前述のように MOSQUITO NEO の二個のウーファーは電気的には 600Hz というクロスオーバーを与えられているのだが、各々はエンクロージャーを独立させることによってメカニカルに低域のみの 2 ウェイ構成を実現している。たった 22 センチのどちらかと言うと小型ユニットなのに、このときの BRIAN BROMBERG のウッドベースは重量感たっぷりに私の眼前に展開した!!

バスレフポートを持っているスピーカーはウーファーの正面に放射される低域と、0. 何秒遅れでポートから排出される低域成分の両方を知らず知らず聴かされているものだが、ポートからの低域に位相遅れがあり同時にキャビネット内部の共鳴、定在波などの不要成分を含んでいると演出的に量感を追加する働きをしてしまうものだが、MOSQUITO NEO は「そんな幼稚な設計ミスはしていないよ!!」と言わんばかりに正確無比な低域をハイスピードに再現するのである。私の内心では思わず拍手喝采である。

必要にして十分、どころか他社のスピーカーで演出効果として誰もが甘んじて受け入れてきた、いやそれを好みの範疇としてスピーカーの個性として片付けてきた低域のあり方に一石を投じるベースを MOSQUITO NEO がこともなげに実現したのである。

さあ、弦楽器での低域の再現性はわかった!!

では打楽器での低域はどうなんだ!? 気に入ると意地悪になる性格なのか、妥協したものはここに置きたくないという信念の現われなのか、次なるテストのために私は選曲を変えた。実は、その後の一時間というもの、私は聴き惚れてしまって、この原稿の執筆を忘れてしまうほどだったのであるが…!?

-*-*-*-*-*-*-*-*-*-

私はスピーカーの低域再生に関しては、コントラバスやオルガンのように継続する楽音と、ドラムやパーカッションのように瞬間的に立ち上がり消えていく打撃音との二種類で必ずチェックするようにしている。さて、MOSQUITO NEO の 22 センチウーファーは私の求める要求にどこまで応えてくれるのだろうか!?

私のテストでは瞬間的に 500W から 800W 程度を出力することもあり、まさにテストコースで開発中の新車で最高速度での挙動を分析するような過酷ともいえる状態を作り出している。もちろん、いつもそんな大音量で全てを聴いているわけではないが、打音のように瞬間的なものは人間は音量感をさほど感じずに、小さな音量でも連続する音は大きく感じるものである。ドラムのテストでは私は限界ぎりぎりをスピーカーに入力しているものだ。

まずはスタジオ録音で正確にコントロールされなければいけないものをとということで、これまでも頻繁にテストにしようしている fourplay の「The Best of fourplay」(WPCR-1214)の 5. chant の冒頭 20 秒間に入っているハーヴィー・メイソンの強烈なフロアタムをかけることにした。

現在ここに展示しているスピーカーは、皆このようなテストに合格したものばかりであり、随筆などでご紹介している Nautilus や Avantgarde など同様に高いハードルをクリアしてきたものである。さて、ボリュームをじりじりと上げてからスタートさせた…!?

「こっ…、これは!!」

軽々と叩き出されるというのだろうか? 心配していた口径の小ささなど微塵のかけらもないほどに払拭する打音の鋭さと、残響として残されるドラムヘッドのバイブレーションがこの 55 畳ある室内の空気に感動的な波動を与える。これは凄い!!

次に GRP の名作である Dave Grusin の「MIGRATION」の 1. PUNTA DEL SOUL 2. SOUTHWEST PASSAGE と連続して見事にスタジオで管理されて録音されたドラムの鳴り方を観察した。テンションは見事に張り詰め、適度に EQ とリヴァーブがかかったドラムが爽快に鳴り響く。Nautilus801 のように 38 センチという大口径のウーファーが叩き出す低域とは違い、高速反応する MOSQUITO NEO の 22 センチウーファーは決して打音の構成要素に遅れを出すことがない。とにかく早い!! これを軽い低音と錯覚されることもあるだろうが、数々のスピーカーを聴いてきた私が判定するに低域の再生帯域は十分に延びており、重量感が不足するということはない。見事だ!!

さて、同じスタジオ録音でも楽音に手を加えていないアコースティックな録音のドラムでどうなるか、次の選曲に移る。

「TRIBUTE TO ELLINGTON」 DANIEL BARENBOIM AND GUESTS

<http://www.daniel-barenboim.com/recordings/398425252.htm>

13. Take the 'A' Train の冒頭にあるドラムロールを久し振りに聴くことにした。思えば B&W の Signature 800 で数々のアンプをチェックする時にも、このドラムが色々なことを教えてくれたものだ。さあ…!?

「あ〜、そうだったのか!! こういう録音だったんだ!!」

前述のようにスピーカー内部に極めて短時間蓄積された低域がエンクロージャーとポートチューニングの影響によって個性として認められる低域を個々に出していた。私は過去のそれらを否定するつもりはないのだが、ここで聴くことになった MOSQUITO NEO でのドラムは付帯する響きを取り除いていくと何が残るのかという明確な事実を私に叩き込んだのである。

低域の打撃音の楽しみ方に重量感というものがあるだろうが、録音に入っていない低域成分を旨みとして加える傾向があったのだろうか? それだけを聴いている分にはいいのだが、MOSQUITO NEO の低域は見事に贅肉を取り去り、ドラムヘッドにスティックがヒットする瞬間のみを忠実に捉えるのである。そこに打撃音の膨張という現象は皆無なのだ!!

さあ、面白くなってきた!! 次をかけよう!!

dmp の Morello Standard から Take Five を聴く。

<http://www.dmprecords.com/CD-506.htm>

続けて、もう一枚の Joe Morello をかけてみる。

Going Places からは、この一曲 Autumn Leaves である。

<http://www.dmprecords.com/CD-497.htm>

低域を検証して次に進まなければ…、という内心の思いとは逆に次々に曲を聴きたくなくなってしまう魅力が MOSQUITO NEO にはあるようだ。さあ、この二曲で私は更なる驚きを体験することになる。

キックドラムである。先ほどまでのドラムは大きなタムをヒットしての音色に音響的な調味料を上手に加えて、見事にオンマイクなドラムを展開してきたものだが、この Joe Morello はそんな手加減はしていない。

この人のキックドラムは手を加えることが少ないアコースティックでシンプルな録音であり、それ故にスピーカーの低域のキャラクターによって再生音も色々と変化する。特に大口径のウーファーでは録音に入っていない「バフッ!!」という独特の付帯音が追加され知らない間にそのスピーカーによる“楽しさとしての演出効果”にもてなされていることがあるものだ。しかし…!?

「そうそう、本当はこうだろう!!」

「タンタン!!」と小気味良く切れ上がり余分なものを残さずに、それでいてスピーカーが構成する前方の空間に大きく広がることなく音像を確立する。

そう!! これですよ、これ!!

これを淡白な低音としたら、他の低音は肥満体となってしまうのか?

よ〜し!!

ドラムのチェックの最後はやっぱりこれだ。Audio lab の「THE DIALOGUE」から(1) WITH BASS と(3) WITH VIBRAPHONE のトラックだ。

http://www.octavia.co.jp/shouhin/audio_lab.htm

口径 22 センチの MOSQUITO NEO に対して、これまでには Avantgarde の BASSHORN や大型システムで散々聴き込んで来た曲だが、どうなるのか!?

「これでいいんですよ!! ドラムのサイズは!!」

高さが 1.3 メートルという MOSQUITO NEO が私の目の前に作り出した音楽が映るスクリーンの大きさは、これまでに体験した他のスピーカーに対してその身長にふさわしく巨大なものとはいえないだろう。

しかし、各ドラムのパートの音像が見事に引き締まっているので、各々の打音の輪郭が重複することなく、個々の分離を維持して展開するのだ。打音の印象はこれまでと同じなのだが、録音過程での操作をしていない録音の成果が明確に音像のセパレーションとして理解できる。そして何よりも気分爽快なテンションでパーカッションが弾けるので、余分な響きを否定し排除するという MOSQUITO NEO の真髓が思わぬところで確認できた。

これは私が長年唱え続けてきたエンクロージャー(箱)の存在感がないスピーカーである。素材とテクノロジーという設計の妙味が素晴らしい低域の再生を可能にしたのである。しかし…、低域の反応を確認するために実に多くの時間を使ってしまった。先を急がねばと思いつつ、次なるチェックポイントは既に頭に浮かんでいた。

4. “NEO” のパフォーマンス その 2. ハーモニーと空間表現

ここまでで相当な時間を使ってしまったが、逆に言えば私がこれほど聴きたいと思うスピーカーは滅多にない。そして、今回のシステムの中核である HALCRO の超低歪みというポリシーと MEXCEL スピーカーケーブルのパフォーマンスが重要な構成要素であることも述べておきたい。

さあ、大音量でのインパルス応答の快感にしばし酔いしれていたが、次はぐっと音量も控えめな曲(笑)で更に MOSQUITO NEO の検証を続けていくことにする。多様な楽器が背景を埋めてヴォーカルも同時にチェックできるものをと「Muse」からフィリッパ・ジョルダーノ 1. ハバネラをかけることにした。

http://www.universal-music.co.jp/classics/healing_menu.html

毎度お馴染みの曲なのだが、導入部が始まったときに私は言葉を失ってしまった。こんなことってあるのか?

「Nautilus 同様にヴォーカルが浮かんでいるぞ!! これは凄い!!」

スピーカーだけにスポットを当てすぎるつもりはないのだが、他の構成要素は以前からここにあったものであり、新たに MEXCEL スピーカーケーブルが加わったと言うことはあるのだが、左右の MOSQUITO NEO にはさまれた空間にたった二つの音源しかないという事実を忘れさせてくれるほどに見事な中間定位でフィリッパのヴォーカルとバックコーラスが並ぶのである。

そして、散々言い尽くしているが MOSQUITO NEO の低域のコントロールがこの曲で一定のリズムで繰り返されるドラムにまたしても発揮されている。音像が引き締まり、ヴォーカルの立ち位置を邪魔することなく、各パートに低域の混入を防止している様子が良くわかる。さすがである!!

そして、Audax 社のソフトドーム型トゥイーターと Morel のミッドレンジの連係によるものなのか、極めてスムーズで滑らかなヴォーカルの質感が心地良く耳をくすぐる。そう、もっと音量を上げて大丈夫よ、とフィリッパがしゃべれるはずもない日本語で語りかけてくるようだ。この声の質感と時折フォルテでバックが盛り上がるパートなどもメタルドーム型のトゥイーターによる演奏とは違い決して眩しくない。音量を上げることが室内の照明の明るさを調光器で強く明るくしていったということに例えると、MOSQUITO NEO で聴くヴォーカルはいくら強くスポットライトを当てて音量を上げてても決してぎらつくことなく、平常心で歌手を見つめることが出来る質感の素晴らしさを感じられるのである。この感触はたまらない!! では次は…? これもおなじみで大貫妙子の“attraction” から5トラック目ご存知の「四季」である。

http://www.toshiba-emi.co.jp/onuki/disco/index_j.htm

「うっとりするような声だ、こんな感触は初めてだな〜!」

“ウッドレス・スピーカー”という表現は私も今回始めて使ったものだが、木を使ったスピーカーでの傑作があるのは事実である。しかし、木材という機械的な変位をする素材を使うにはそれなりの設計が必要であり、ただウッドという触れたときの感触からのイメージで温かみのある音質のスピーカーだというのは短絡的ではなかろうか? 国産でもモルトウィスキーの樽でスピーカーを作ったというシャレもあったが、ユーザーの既成概念を上手くセールスポイントに生かしたということもあるだろう。

一切の木材を使わないスピーカーとしては GOLDMUND の EPILOGUE を私は大変高く評価している。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto41.html>

また、カーボンファイバーを使用したスピーカーも過去に傑作があった。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto33.html>

このようなハイテク素材を使用した事例では金属臭というか、硬質でひんやりした冷たさや鋭さという言葉でのイメージを持っているのが普通だろうが、実は優秀な設計者に手にかかるとウッドよりも人間味と温度感をたたえる演奏が出来てしまうのである。このときの大貫妙子の声には極上のシルクの手触りを思わせる“天然素材の演奏”という印象が瞬間的に私の頭の中にひらめいたものだ。そして、バックのストリングスが同様に素晴らしい質感だ。エコー感は申し分なく潤いを含み、MOSQUITO NEO の身長以上の空間提示をしているのではないか。

これはひょっとして、Nautilus のお家芸のはずではなかったのか??

次第に Nautilus や Signature 800 の独壇場として私が認知していた領域が何と MOSQUITO NEO によって鮮やかに更新されていくではないか!!

「それをできるのは B&W だけじゃないぞ!!」と言わんばかりだ!!

バックの弦楽器の美しさとヴォーカルのしなやかさを聴き進むうちに男性のヴォーカルでも確認しなくては、と次なる選曲である。

RUSSELL WATSON である。つい先日 TBS のニュース番組に出演してオ・ソレ・ミオを生で歌っていたが、好青年という印象であった。

<http://www.universal-music.co.jp/classics/watson/index.htm>

まず『The Voice』から 1.Nella Fantasia

イントロが始まったところで、またまた私の口はあんぐりと開いたままになってしまった。この音場感の広さと背景に並ぶオーケストラそしてコーラスとの奥行き感は何んということだろうか!! そしてここでもグランカッサを静かに叩いてごく低い周波数でのリズムが時折繰り返されるのだが、その質感が素晴らしい。重々しい低域だと思っていた他のスピーカーでは、実はグランカッサを床に置いて叩いていたのではと思うほど、MOSQUITO NEO では打音そのものがちゃんと他の楽音と同じステージに乗っているかのように宙に浮かんでいるのである。

クロスオーバー・クラシックという呼び方でホール録音の楽音をスタジオワークで巧みにヴォーカルと重ね、一つの音場感に組み上げてしく手法は最近の流行であるが、それにしても中空に定位する楽音と余韻の浮遊感私の認識では Nautilus が最高であったのだが、今ここで歌っている RUSSELL WATSON の背景描写は Nautilus のレベルに達しているのではないか? という疑いが私の胸中をよぎっていく。

さて、次は 12.Funiculi - funicla

背後のオーケストラもそうだが、バックコーラスの広がり各パートの鮮明さはなんとしたことだろう。しかも、RUSSELL WATSON の声と決してオーバーラップすることなく、エコーが飛び散るように空間に尾を引いて消えていく。素晴らしい!!

14. 誰も寝てはならぬ Nessun dorma!

静かに合唱が Nessun dorma の主題を繰り返し、次第に盛り上がる中で RUSSELL WATSON の声量がステージを埋め尽くすように展開していく。しかし、ここでも私の目と耳を奪っていったのは中間定位の素晴らしさである。この中間定位とは左右のスピーカーの間の音源があるはずもない空間に定位するという音響的虚像のリアルさを述べたものであるが、これを逆説的にたった一言で表すと次のようになる。

「スピーカーが消える!!」

あ〜、まずい!! Nautilus の専売特許であったはずの最大のセールストークがデビューして一年目という新参者に奪われてしまったのか!!

ギター・ソロ、ウッドベースのソロ、ドラムなどで MOSQUITO NEO の正確な楽音のコントロールの有様を確認し、次にバックの演奏が色々なヴォーカルで音場感のあり方も確認した。しかし、もう一つ確認しておきたい楽器がある。

そう、ピアノだ!!

しかもソロの演奏で聴きたい。私はスタジオでの録音で程よいお化粧を施した例として「WIZARD OF

OZONE～小曽根真ベスト・セレクション」UCCV-2003の11トラック「We're All Alone」を。
http://www.universal-music.co.jp/jazz/j_jazz/ozone/m_ozone.htm

そして、ヴァレリー・アフアナシエフによるムソルグスキー「展覧会の絵」を前回同様にチェックして見ることにする。私が使っているディスクは13年前の初版のものでディスク No はCOCO-9046だが、最近では下記のように再販売されている。

<http://columbia.jp/crest1000/list111-120.html#crest118>
<http://columbia.jp/classics/index.html>

インパルス応答性能を思わせる立ち上がりの鋭い楽音は同時に余韻感も聴きどころであり、これまでにテストしてきた曲はどれも両方が同時に検証できるものだ。そして、ピアノの質感も上記の曲を使って色々なシステムで各々の特徴をよく引き出してくれたものだ。さて、どうなるか!?

まず上記二曲において安堵感ともいえる十分な余韻感が片やスタジオワークでの巧妙なりヴァーブから、そして片やフランクフルトにあるドイツ銀行ホールにおけるエコー感として、MOSQUITO NEOは演奏時間が累積されるほどにみずみずしくなるかのように絶妙の音場感を発生させる。

これはいい!!
そして、聴き進むうちに…!?

「待てよ～? 今までのスピーカーで聴いてきたピアノの質感と違うぞ!?

全くシンプルであり、かつ私の過去の記憶のファイルをいくら探してもこのようなピアノの質感が思い当たらないのである。

高炭素鋼で作られたピアノの弦がハンマーに叩かれて音が出るという原理は誰でも知っていることだろうが、木製の芯にフェルトを巻きつけたものがピアノのアクションにずらりと並ぶハンマーであるということを思い出させてくれたのである。

まさか、このハンマーの芯材が金属やプラスチック、あるいはセラミックのように非常に剛性が高いもので作られているピアノを数多く聴いてきたのではなかったのか!? と、自問してしまった私がそこにいたのだ。

MOSQUITO NEOが聴かせるピアノはいずれの録音でも、聴く者をピリピリさせるような緊張感をもたらしことは決してなく、打音の瞬間が程よい引き締め方をしながらも冷たく硬質に感じにならないのである。実に聴きやすく、それでいて十分な解像度と余韻感が両立しているのだ!!

一音ずつが明確にセパレーションしながら各々のエコー感を放射し、それでいて金属的な響きは皆無であり、本来の響きはカエデやメイプルという主材料でピアノが作られているということがイメージとして伝わってくるかのようなのである。響きが重なる和音が幾重に展開しても、音源の輪郭を細かく描写し、それでいて“人肌”に優しい質感が今までになかったピアノの音色となって耳なでていくようだ。

さあ、解像度ありテンションあり、しかし、そこにしっとりとした落ち着きをピアノで提示できるということは、多数の楽器群でハーモニーを構成するオーケストラではどうになってしまうのか? MOSQUITO NEOの最終チェックはいよいよオーケストラに迫っていく!!

5. “NEO”のパフォーマンス その3. オーケストラを極める

ヴォーカルという主題でチェックしたつもりが、それを取り巻く全体像としてステージにあるべきもの全てを見事に再現する MOSQUITO NEO だが、最も私が素晴らしいと感じている楽器がある。弦楽器である!!

フィリッパ・ジョルダナーノや大貫妙子のバックでも、そして RUSSELL WATSON のステージでも私が過去に覚えのあるヴァイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバスなどの弦楽器群の質感が素晴らしいのである。

いよいよ MOSQUITO NEO の分析の締めくくりはオーケストラにしようと思っていたのであるが…。実は、昨日はバーンインを終えるのももどかしく数曲オーケストラを聴いたのだから、それがまた最高であった!!

この私は多くのブランドを扱うので“最高”などという表現は滅多に使わないのであるが、昨日はオーケストラばかりを聴いていたのである(^_^)

なぜ、それほど MOSQUITO NEO でのオーケストラに衝撃を覚えたのか?それは前回の小編『音の細道』*第27弾*続編で「ESOTERIC “MEXCEL Cable” と Connoisseur 5.0 が鳴らす Nautilus!!」に登場するこの曲、セミヨン・ビシュコフ指揮、パリ管弦楽団によるビゼー「アルルの女」「カルメン」の両組曲である。(PHCP-5276 廃盤)を時をほぼ同じくして聴いた時の印象があまりにも強烈であったからだ。

1. 前奏曲が始まった瞬間に只者ではない描写力が私を襲った。それは主題を演奏する弦楽器群の存在感がしなやかな質感とともに空間に浮かび上がったからである。

まず、オーケストラの弦楽器群を一つに束ねてしまったように聴かせるスピーカーは意外と多いものだが、対象比較の実例をその場で聴かないと一般的にはわかりにくいことだろう。しかし、MOSQUITO NEO で聴く弦楽器は各パートごとにまるで空間にブラシをかけてストリングスの流れに方向性を付けながらも個々の演奏者の存在感をきちんと区分けして聴かせるという解像度の素晴らしさにある。

次に、弦楽器の質感なのだが、これを例えるには難しいが上等なシルクのハンカチを二の腕にかぶせてそうっと引っ張るときの肌の感触と例えたらどうだろうか。艶やかであり光沢があり、その上しなやかなので摩擦とはいえない人の肌に優しい感触をともなってハリと落ちていくのである。それに比べると今ひとつの出来栄のスピーカーでは、生成りの生地か手ぬぐいを肌に感じたようなものである。

この一本一本の弦楽を分離する見事な解像度と、本当に耳に心地良い感触という質感の素晴らしさがオーケストラを聴くことに快感を覚えるほどの興奮をもたらしてくれたのである。

ソリッドウッドによって作られた名器、sonusfaber の Guarneri Homage に関しては下記に詳細を述べているが…、正に私は Guarneri Homage の質感にマッチした低域をペアリングさせたスピーカーが表れたという例えもオーバーではないと考えている。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto11.html>

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto16.html>

8. ファラドールでは前奏曲と同じ主題を管楽器といっしょに繰り返し始まるのだが、このときの管楽器の質感もまた素晴らしい。それはヴォーカルのサ行の発音が MOSQUITO NEO では心地良く聴けるという特徴にも通じるものであり、管楽器のエコー感を鮮明に振りまきながらも耳に刺さるような刺激臭は一切ないのである。これは快感である!!

そして、木管楽器にスピーカーのセンターを明け渡して太鼓のリズムが軽快にホールに響き渡り、タンバリンの打音が距離感をもって空中を飛んでくるとヴァイオリンがピッチカートに刻み始め、そのデリケートな余韻感が見事に木管楽器のステージ上で調和するからたまらない!!

大太鼓が連打される最後のパートでは前述の見事な低域がホールに低音のエコーだけを取り残してはまずい、と言わんばかりに見事に引き締めてフィニッシュさせる。オーケストラの各楽器の余韻感に統一感を持たせることがいかに大切かを MOSQUITO NEO は私に“楽しく”教えてくれるのだから頭が下がってしまう。

「カルメン」10. アラゴネーズでは冒頭のお馴染みの主題が爽快地に演じられた後、中央ではオーボエとフルート、そしてタンバリンが軽快に絡み合い、それをヴァイオリンのピッチカートが包み込む展開が続く。その中でアルコに転じた弦楽器がなんと美しいことか!! 新しい録音とは言えないが通常の CD に含まれる情報量をことごとくピックアップしている P-0s を主力としたコンポーネントの面目躍如たるどころであり、アンプとケーブルという伝送経路の実力に舌を巻き、そして MOSQUITO NEO の美しく引き締まった肢体を惚れ惚れと“耳”にする快感が続く。

さて、次は…!?

15. ハバネラ では冒頭からトライアングルとタンバリンのリズムが弦楽のアルコの隙間から奥行き感をもって響き、その距離感 Nautilus のそれを上回るかのような錯覚さえ引き起こす。どうして MOSQUITO NEO はこんなにステージの奥まで視野を広げ、かつ遠近感の表現において抜群のセンスを持っているのだろうか?

それはトゥイーターのハウジングのデザインにあるのだろうと私は考えた。

私は Nautilus やそのシリーズ製品の関しての解説で球面波をきれいに拡散することがいかに音場感に貢献するかと言うことを繰り返し述べて来たものだが、その球面波を生成するにはユニット自身の周囲に反射面があってはいけないのである。それが Nautilus のデザインの根拠にもなっているのだが、MOSQUITO NEO では写真を見てお解りのようにトゥイーターは空間にポンと独立する形でデザインされており、余分なバツフル面を持っていないのである。

大方のスピーカーはトゥイーターも面積がある平面に取り付けているものだが、そのトゥイーター一回りの反射面がユニット後方への球面波の拡散にストップをかけてしまっているものと私は考えている。そして、MOSQUITO のエンジニアたちもそれに気が付いているのであろう。

やはりトゥイーターを限りなく小さい取り付け面積で設計することが音場感の再現性に大きく関与しているということを具現化したのである。

「もし私がスピーカーをデザインしたら絶対に同じことになるな～」

と自説を思い浮かべながら演奏が進み、感極まったという例のところではフォルテが発散される。この楽員が一斉に放射するエネルギーが空間を伝わってくる過程でどれだけ原型を留めるのか。

この原型とは各楽器の立ち上がりと消滅という時間軸に対する位相のあり方をご理解頂きたい。それがきちんとそろっていないと、どこかで強調された残響だけが残り、そのせいで他の楽音も“迫力に見間違ふ”ことのある荒さが付加される。

しかし、MOSQUITO NEO に関しては、そんな心配はなかった。指揮者のタクトの動きがもしもスピーカーの余韻成分を一刀両断にすばっと切り裂き、これ以上の響きを出すなど指示したように、伸びる余韻はそのままで空中を滑らせ、一部の楽音だけが垂れ流すスコアーにないエコーをピタリと制止するのである。設計の古いスピーカーには出来ない芸当であるが、MOSQUITO NEO はこともなげにタクトの動きを音にしている。

つややかな弦楽器の質感に包まれながら、しかし切れ味を失わないというオーケストラを私は本当に楽しむことが出来た。スタジオ録音に付いても稀に見る魅力を発揮している MOSQUITO NEO であるが、やはりオーケストラという醍醐味に私を導いてくれた MOSQUITO NEO に、私は近代稀に見る情熱で一目惚れしてしまったようだ。

サンプルとして語ったオーケストラの演奏は一つだけだが、実は時間のある限り何曲も続けてオーケストラを聴きまくったものだった。ただ、他の曲での私の印象を語り続けると終わらなくなってしまうので、Nautilus での演奏で聞き込んでおり、最も比較対照に記憶の新しい選曲としたものだ。

さあ、MOSQUITO NEO はここに来られた人たちにどのくらい気に入っていただけるであろうか？その確立を予測するのも私のビジネスの根本でもあるのだが、それは私の自信によっても大きく左右されるものだ。

最後に MOSQUITO NEO は私に大いなる自信を与えてくれたことに感謝している。

ここで MOSQUITO NEO を聴かれた皆様のお顔に至福の表情が表れることを私は 90% という確立で見ている。さあ、皆様はその中の一割でしょうか？

それとも…!?

第二章「磨けば光る潜在能力の物凄さ!! 更に引き出された NEO の魅力!!」

1. ESOTERIC と “NEO” の調和

素晴らしいコンポーネントを手にするると、そのパフォーマンスに更に磨きをかけてみたくなるのは、ちょうど料理人が新鮮であり貴重な高級食材を手に入れたときの心境と同じであろう。

2004 年 4 月に私がめぐり合った数年に一度という惚れ込みよりの “NEO” に更に美しいメイクを、更に気品ある衣装を、そして淑女としてのたしなみを与え、大人の魅力として複数の表情を持つ美女に仕立ててみたくなるものである。

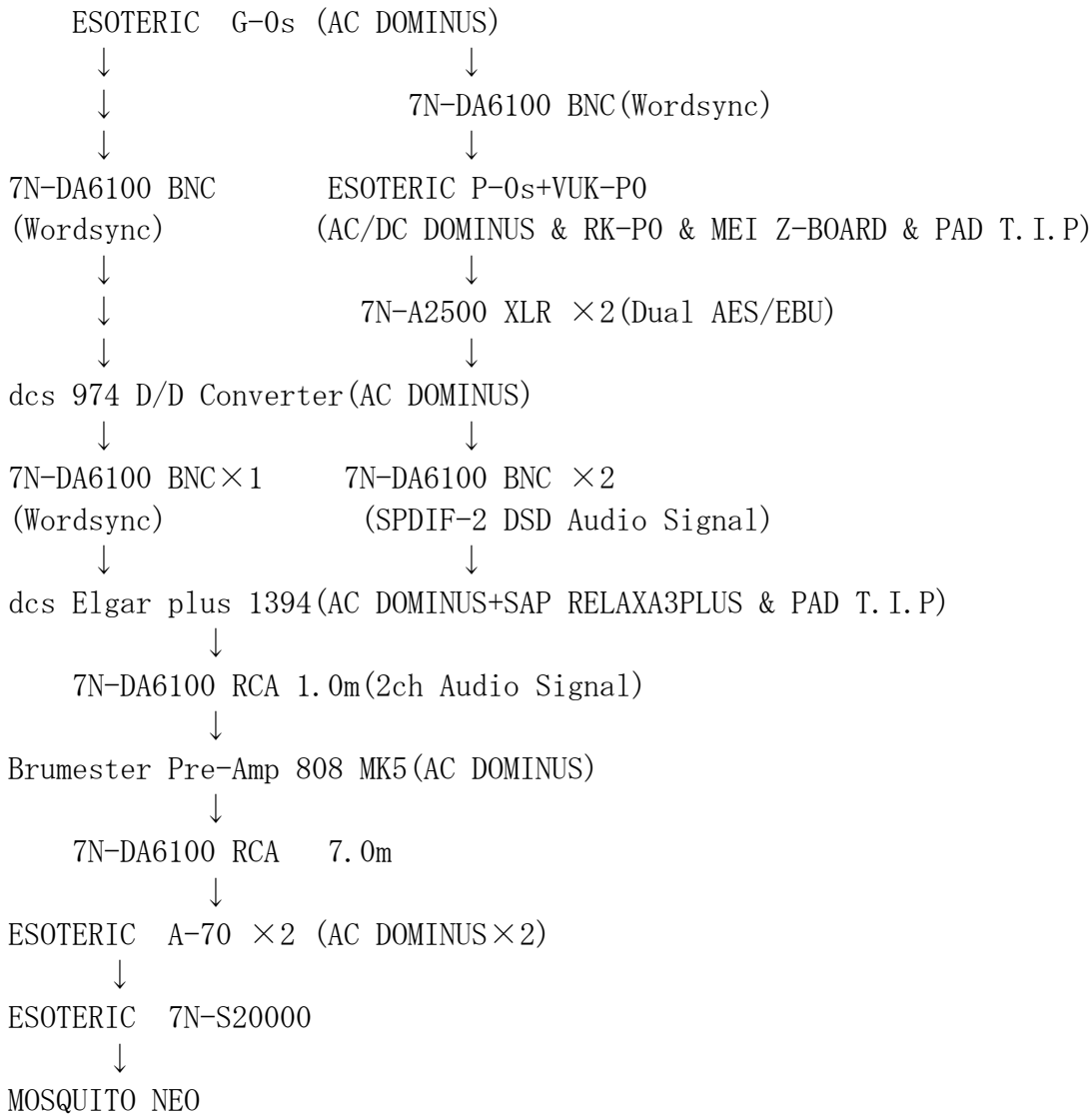
しかし、そこに私が要求するのは外観だけの成長ではなく、健康的であり美しくしなやかな肢体の内側には、強靱であり機敏な反応を示す筋力も同時に身に着けさせたいものだ。

それを追求するいったんとしてこの教訓が私の脳裏をよぎった!!

そう、まずはシグナルパスのケーブルを一つの思想のもとに統一し、フロントエンドからの情報量のひとしずくも取りこぼさないようにと、前は一部が他のケーブルであったが、今日はすべてを“MEXCEL Cable”とし次のセッティングに切り替えてじっくりと聴き込んでみたのである。

そうしたら…!?

-----今回のリファレンスシステム-----



まずはケーブルとパワーアンプの変化を確認しなければと、聴きなれている曲からということで押尾コータロー『STARTING POINT』6.Merry Christmas Mr.Lawrence をかけた。
<http://www.toshiba-emi.co.jp/oshio/>

これがいけなかった!! こんな音を聴くべきではなかったのだ!!

「え～、このエコー感は何に? なんだというんだこれは!!」

良くある例えで、頭をがつんと叩かれたような衝撃と言われるが、まさにこのときの第一声を聴いた私はもろに頭をハンマーでがつ〜んと殴られた心境であった。そのせいでエコー感がいつまでも残っているのか(笑)

押尾の演奏も耳にタコと言えるほどに、時間の進行に伴って展開する演奏の端々までを記憶しているのだが、こんなに滞空時間の長い余韻感を眼前で見せられたのは初めてではないだろうか!!

ギターのガットが弾かれた瞬間から余韻が消え去る瞬間まで、まるでストップウォッチで測れるほどのエコーが“NEO”周辺の空気に漂っていくのである。しかも、それは難しい例えなのだが、テンションのある余韻感なのだ。響きの途中でゆるくなってしまい質感が変ることなく、ピーン!! とリニアな減衰特性で時間の経過にきちんと反比例しながら消滅していくのだ!!

只者ではないぞ、これには参った!!
この検証はここでやめるわけにはいかない!!

2. 時間を滑っていくようなひと時

ESOTERIC A-70 は Nautilus システムに使用していたもので 24 時間通電を続けているものであり、本体の熱気は相当なものだ。当然バーンインは十分にこなしてある。そして、ここ数日演奏を繰り返していた 7N-S20000 の MEXCEL スピーカーケーブルもかなり熟してきたようだ。

<http://www.teac.co.jp/av/esoteric/mexcel/index.html>

しかし、システムの切り替えではその直後にすべてのパフォーマンスを引き出せるものではない。だが、この時は各々にバーンインした二つのシステムを中間でつなぎ合わせたのだが、まるで熟した果物を何種類もジューサーで絞り、ミックスしたら未体験の美味と香りが口の中にパッと広がったごとの調和を見せていたのである。何も疑いはなく、ただおいしい、とろけるほどおいしいのである!!

次に 12. HARD RAIN にスキップした。この曲の低弦とリズムは独特の重量感をかもし出しているのだが、ここでも驚きの発見があった!!

「なんと!! 低音の余韻ってこんなに出ていたんだ!!」

MOSQUITO NEO の低域は早い!! しかし、それは楽音そのものが発生した瞬間と、録音中の楽音がなくなったときに追従するブレーキ感の両方がハイスピードでなければいけないものだ。つまり、スピーカーが低域のエネルギーを溜め込んで、時間経過とともに質感を変えながら小出しにしているということはあってはいけないのである。

そんな、スピーカーによる低域成分の貯蓄効果? がまったくないものを聴いた時に、皆さんはどのように思われるだろうか?

連続する低域のエネルギッシュな演奏こそ、スピーカーの本性が見えてくるものである。言うなれば、録音に入っていない低音をスピーカーの個性、演出効果としてどうしても付け足してしまうものが多いものだ。

それらを引き算した音を私はこれまで多数経験してきたのだが“NEO”の低域はまさに“すっぴん美人”そのものなのである。6. Merry Christmas Mr. Lawrence で見られた高域のエコー感の素晴らしさ、実はそれは高域だけでなく低域にこそ、その真髄とも言えるパフォーマンスがあったのである。

再生する低域周波数に関係なく、楽音の発祥と消滅が正確に捉えられるということは低音の余韻感が見えてくるということなのだ。つまり、きちっとブレーキがかかるウーファーを有するスピーカーは、低音のインパルス応答が素晴らしく、そしてそれが消えていく過程のエコー感の描写力を究極的に高めているのである。

そして、ここでふと思い当たった!!

「そうだ!! “MEXCEL Cable” のパフォーマンスがこれなんだ!!」

-*-*-*-*-*-*-*-*-*

ケーブルが伝送過程で失ってしまうものがある。しかし、失ってしまった情報は音楽のバランスを変質させるので、何かを付け足したような印象をうけるものだろう。

相対的に高域の伝送状態が損なわれれば低域に量的な増加を感じるようなものである。

そう、ケーブルの評価では消去法によって音質変化を感じるものであり、決してケーブルが余韻感や楽音のテンション、質感という情報を付加させるということはないものだ。今ここで感じられたことは正にすべての経路を“MEXCEL Cable”で統一したことによって“NEO”が敏感に反応したということに他ならないのだ。そして、ここに A-70 という存在感に新たな光が当たってきたことを私は実感したものだ。

低域の絶妙なコントロールに舌を巻いた後で、多用な楽器が背景を埋めてヴォーカルも同時にチェックできるものをと「Muse」からフィリッパ・ジョルダノ 1. ハバネラをかけることにした。

http://www.universal-music.co.jp/classics/healing_menu.html

「なんと、このヴォーカルとバックコーラスの分離感と質感は!!」

押尾のギターのエコー感がいかに“NEO”の周囲にオーラを発したかという驚きが記憶に新しい一瞬に、フィリッパの声にこれほどの滑らかさと潤いを同時に感嘆ことはなかっただろうという私に第二の衝撃波が襲った。

ピーン!! と弾かれ引き伸ばされるギターの余韻感とは違い、複雑な声質の表現に当たって、発声後に閉じられる口元と再度唇が開かれてビブラートを繰り返すフィリッパに惚れ惚れと見とれてしまうような数秒間を“NEO”は提供してくれた。あ～、この質感をお聴かせしたい!!

そして、例のドラムがセンターに響く!!

「あ～、叩いた瞬間が見えた!!」

前述のように“NEO”が生み出す低域は大編成のオーケストラとヴォーカルを背後に並べた録音に対して、ごく低い周波数で繰り返されるドラムをぽっかりと“NEO”のセンターに浮かび上がらせるではないか。

一部のスピーカーのように床の上に低音だけが急降下して、這うように足元に押し寄せてくる低

域の表現ではないのだ。ヴォーカルやオーケストラが並ぶステージに皆が並んで演奏しているという目視を可能にした見事な配列が“NEO”と ESOTERIC によっていとも簡単に実現してしまった。

-*-*-*-*-*-*-*-*-

女性ヴォーカルを快感と愉悦のうちに聴かせる“NEO”を惚れ惚れと眺め、それでは定番の選曲を私の脳が要求した。大貫妙子の“attraction”から5トラック目ご存知の「四季」である。
http://www.toshiba-emi.co.jp/onuki/disco/index_j.htm

「おお!! 見える見える!!」

ギターとウッドベースが左右で展開するお馴染みのイントロ。その次に登場した大貫妙子のヴォーカルが“NEO”の頭頂部のわずかに上の空間に表れたとき、私は喜び 100%に驚き 100%を同時に味わうことになった。

まるで大貫妙子の背後に反射板を屏風のごとく並べて、彼女の発するセンテンスの終わりの息遣いに至るまでをもったいないと響かせてくれるような豊潤なエコー感がそこに見えるのである。

“NEO”の類稀な広々とした空間というキャンバスに MEXCEL Cable と A-70 が霧吹きで潤いをスプレーし、新緑の木々に宿るみどりの葉の一枚一枚にしずくがたれるように色彩感を見事に再生するのである。乾燥した葉が鮮やかに蘇るようなエコー感に包まれて、この曲のサビで背後を飾る弦楽器の音色もなんと美しいことか!!

私の記憶する大貫妙子の演奏に対して最優秀歌唱“再現”賞がこの時に確実となった。

3. スケール感を司るものとは?

女性ヴォーカルを主軸として展開されるテスト曲で“NEO”の魅力を引き出したパートナーの存在感をつくづく実感していくうちに、その広大な空間表現を男性ヴォーカルでも確認しなくてはと次なる選曲である。

オーケストラと合唱を背後に従えた録音の RUSSELL WATSON である。
<http://www.universal-music.co.jp/classics/watson/index.htm>

まず『The Voice』から 1.Nella Fantasia

イントロが始まったところで、フィリッパのハバネラで認知されたステージ感としての水平方向に統一された位置関係と両翼への音場感の広がりもここでも真っ先に私を捕らえた。この音場感の広さと背景に並ぶオーケストラ、そしてコーラスとの奥行き感は何んということだろうか!!

そして、ここでもハバネラの時のようにグランカッサを静かに叩いてごく低い周波数でのリズムが時折繰り返されるのだが、その響きの残存性がなんと高いことか。ここでも低域でのエコー感という“NEO”の魅力を再度確認させられることになった。

「試しに音量を絞ってみるか!? ……えっ!!」

最低域の響きの消滅までが見える。WATOSON のヴォーカルの口元のサイズはもちろん小さくなるのだが、エコー感のあり方は現状維持を続ける!!

こんなことってあるのか?

続いて 12. Funiculi - funicla

背後のオーケストラもそうだが、バックコーラスの広がりとは各パートの距離感、そして演奏される空間を物差しで測り、そのまま音量を下げる。

「あ〜、さっきと同じ間隔で音源が並んでいるじゃないか!!」

にぎやかな曲をボリュームを絞って聴いてみたら、これまでのチェック項目で“NEO”と ESOTERIC のコンビが獲得したポイントがそのまま生き続けているのだから呆れてしまう。本当か!?

14. 誰も寝てはならぬ Nessun dorma!

導入部からの合唱が Nessun dorma の主題を繰り返してアレンジの上手さが光る。こらえつつも次第に盛り上がる中で RUSSELL WATOSON の声量がステージを埋め尽くすように展開し、パバロッチェのオハコをドラマチックに自分のものとして歌い上げていく。そして、ここでも音量を下げて聴きなした。

「そうそう、望遠レンズのズームを回して引いたときのようだ!!」

“NEO”は忠実にヴォーカルとオーケストラの全景を自分の周囲に描き出し相当なボリュームでもストレスを感じさせることなく聴かせるのだが、その耳に心地良いフォルテの表現をズームアップと例えるならば、この時にステージがスーッと遠ざかっていく音量の絞込みはクローズアップから広角へと視野を広げていくイメージにドンぴしゃりなのである。

音量の増大に伴う音像の拡大はあるだろう。

しかし、音量を絞り込んでいっても音場感が維持されるというのは何とありがたいことか!!

オーディオにおけるスケール感やはり相応の音量で求められるものというのが一般的なものだが、MEXCEL Cable と A-70 がサポートしたときの“NEO”はスケール感という概念に新しい一ページを開いたのである。

「これって…、音量を下げてても空間表現の大きさは変わらないじゃない!!」

度々述べてきた余韻の存続性、ケーブルによる情報量の維持、それらが総合的に“再生音量のピアノニッシモ”でスケール感の縮小という比例関係を否定したのである。これは素晴らしい!!

4. “NEO”流? オーケストラの楽しみ方

最近ちょっぴりご無沙汰していた選曲でゲルギエフとサンクトペテルブルク・キーロフ管弦楽団・合唱団「くるみ割り人形」でチェックすることにした。

数あるオーケストラの録音でも、この「くるみ割り人形」では指揮者とプロデューサーのセンスなのか大変解像度の高い録音であるということは以前から承知していた。しかし、一歩間違えると弦楽器と金管楽器の演奏にはアルミの粉末を刷り込んだようなきらめきが見えてしまうことがあるのをお気付きだろうか？

先日私が聴き惚れたセミヨン・ビシュコフ指揮、パリ管弦楽団によるビゼー「アルルの女」「カルメン」(PHCP-5276 廃盤)ではとにかく弦楽器のしなやかさ、美しさに心奪われたものだが、これとは録音の感性が違ふとしか言いようがない。そして、それを上手く鳴らすことに私はここでのチューニングの方向性を見出していたものなのである。

1. 序曲が始まった。

「おお!! ホールエコーがいい!!」

たちどころに私の期待感が現実の物となって滑り出していく喜びがある。トライアングルの音色は本当にソフトドーム・トゥイーターなのかと耳を疑うほどに鮮明であり、弦楽器群が発するエコーがホールの天井と壁に反射して手元に届くように情報量が多い。

15. 「中国の踊り」

「ファゴットのエコーが長いぞ。ヴァイオリンのピッチカートがいいぞ!!」

そう、低い音階での余韻感が高音楽器のそれと同レベルで展開し存続しているので、ゆったりとしたホールの奥行き感を“NEO”が聴かせる。そして、ピッコロ、フルートの痛烈とも言える演奏が、吹き込む息の強さはあれど決して刺激成分を含まないのである。これは聴きやすい。

16. 「トレパーク」

猛烈な勢いでアルコを切り返す弦楽器群に対してパーカッションが背後から強烈な打音を響かせる。しかし、今までと違う弦楽器の質感に躊躇しつつ、自然と指がリズムを刻み始める。

「あれ、私はもしかしたら緊張していないのでは!？」

そう、この曲をじっと正視して各パートの挙動をチェックしようと習慣付いていた私は、前述の“アルミの粉末を刷り込んだようなきらめき”がどの瞬間に目にとまるのかを身構えて聴いてきたのだった。

ところが、“NEO”ときたら役者が違うと言わんばかりに、今までのスピーカーはオーバーアクションだったのよ!! と私に無言のアピールをするのである。確かに、関節炎を患ったバレリーナが踊るようなぎこちなさは皆無であり、オーケストラの楽員すべての体に天然成分のオイルが注入されたように演奏の滑らかさが引き立つのである。これはいい!!

「そうか!! どうして“NEO”でオーケストラが聴きたくなるのかわかったぞ!!」

解像度の極みというのは、万年筆のペン先がいかにか細い線を引くことが出来るかという楽音の輪

郭、ディティールとして色彩を区分けする境界線を強調することではないということなのだ。

むしろ境界線が引かれているということを聴き手に悟らせずに、輪郭の中身に見られる産毛の毛羽立ちのような肌触りを私たちに感じさせることなのだ!! その感触を指と耳で私が楽しんでいるから、オーケストラに“癒し効果”とも言える興奮をとまなう安らぎを感じるのだ!!

MEXCEL Cable と A-70 は、楽音の産毛とも言える微細な情報をスピーカーまで確実に伝えているということ、そして“NEO”は微風に反応してマイクロのさざ波を起こしている音の産毛がボディーを包み込んでいるスピーカーなのだ!!

スピーカーの能力が中立性、高忠実度という視点において、そこに至るプロセスの変化を微妙に、そして確実に聴き手に伝える。オーディオとはコンポーネント全体の連鎖によるパフォーマンスであると私は常々実感しているものだが、世界的にも希少価値な実演がここに実現した。

ストレスフリーという言葉を実感するには“NEO”が最適である。
試聴の時間は30秒でも3時間でもいいでしょう!!

一度口にした美味を人間は生涯忘れることがないのでから…!!

第三章「NEOによって融合されるコンポーネントの潜在能力!!」

一流の料理人とは一般の人々と何が違うのだろうか? 手先が器用、目がいい、舌が肥えている、頭がいい?(笑) 身体的な能力が優れているからというわけではないのです。舌がいい…、と言っても味を分析するには舌は単なるセンサーであり、味覚という信号を受信した脳がいかにかそれを評価することができるかが重要なのです。私が思うには、出来上がった料理の味がわかるということだと思います。では、わかるということはどういうことか?

以前テレビを見ていて大変印象に残ったことがあります。香水の産地? で有名なフランスでは国立の調香師を育成する学校があるそうです。確か生徒数は600? か1,600人ということでした。毎年の卒業生はその中でも5~6人という厳しい基準があるそうです。

香水の原料となる個々の香りの種類は1,500種ほどがあり、それらをすべて嗅ぎわけて記憶しないといけなそうです。そして、結果としてはある香りを嗅いで成分を分析できるように、逆に数種の成分を混ぜ合わせた場合の仕上がりの香りを特定できなくてはならないそうです。

私から見れば神業と思えるような超人的な嗅覚と記憶力なのですが、確かにプロフェッショナルの世界とはそういうものなのでしょう。

毎年いくつかの新種は開発されるのですが、自然界に存在する香りの材料というのはある意味有限と言えるかもしれません。しかし、その組み合わせによる新種の創造というは無限かもしれません。

さて、私の仕事で取り扱う製品数はコンポーネントとしても、工業製品という背景からしても、上記のように一千種類以上などという数には及びません。従って、記憶することに関しては多少楽かもしれませんが、香りのように結果を物理的に固定化・安定化することは中々難しいものです。

そして、何よりも時間経過に伴って新しいものがどんどん開発されてくるという特徴もあります。しかも、それらの組み合わせは膨大なパターンになり、更にそれらのパフォーマンスを持ち運べるような“固定化・安定化”ができないという性質があります。

このような背景の聴覚の世界でプロフェッショナルには何が要求されるのか？

「オーディオなんて所詮その場限りの曖昧なものだから…」という概念に必死のアンチテーゼを試みた数日間のインプレッションをやっとまとめることが出来ました。

狙った音を組み立てる…。簡単なようで難しいことであり、香水のように瓶に詰めて皆様にお届けできないものです。しかし、その間違いなく私の作り上げたものを食して頂ければ皆様の感性でもお解りいただけます。

今回の最後に述べている一言、“試食”とは何を意味しているのか？

ぜひご一読頂ければと思います。<m()m>

1. こだわりの極み

素晴らしいコンポーネントを手にするると、そのパフォーマンスに更に磨きをかけてみたくなるのは、ちょうど料理人が新鮮であり貴重な高級食材を手に入れたときの心境と同じであろう。

2004年4月に私がめぐり合った数年に一度という惚れ込みよりの“NEO”に更に美しいメイクを、更に気品ある衣装を、そして淑女としてのたしなみを与え、大人の魅力として複数の表情を持つ美女に仕立ててみたくなるものである。

しかし、そこに私が要求するのは外観だけの成長ではなく、健康的であり美しくしなやかな肢体の内側には、強靱であり機敏な反応を示す筋力も同時に身に着けさせたいものだ。

先日も巻頭言として述べた一説であるが、その思いはH. A. L. のリファレンスとして定着した“NEO”を核にして更に素晴らしい音質を目指す私の欲求とこだわりという飽くなき追求の姿勢はとどまるどころを知らない。

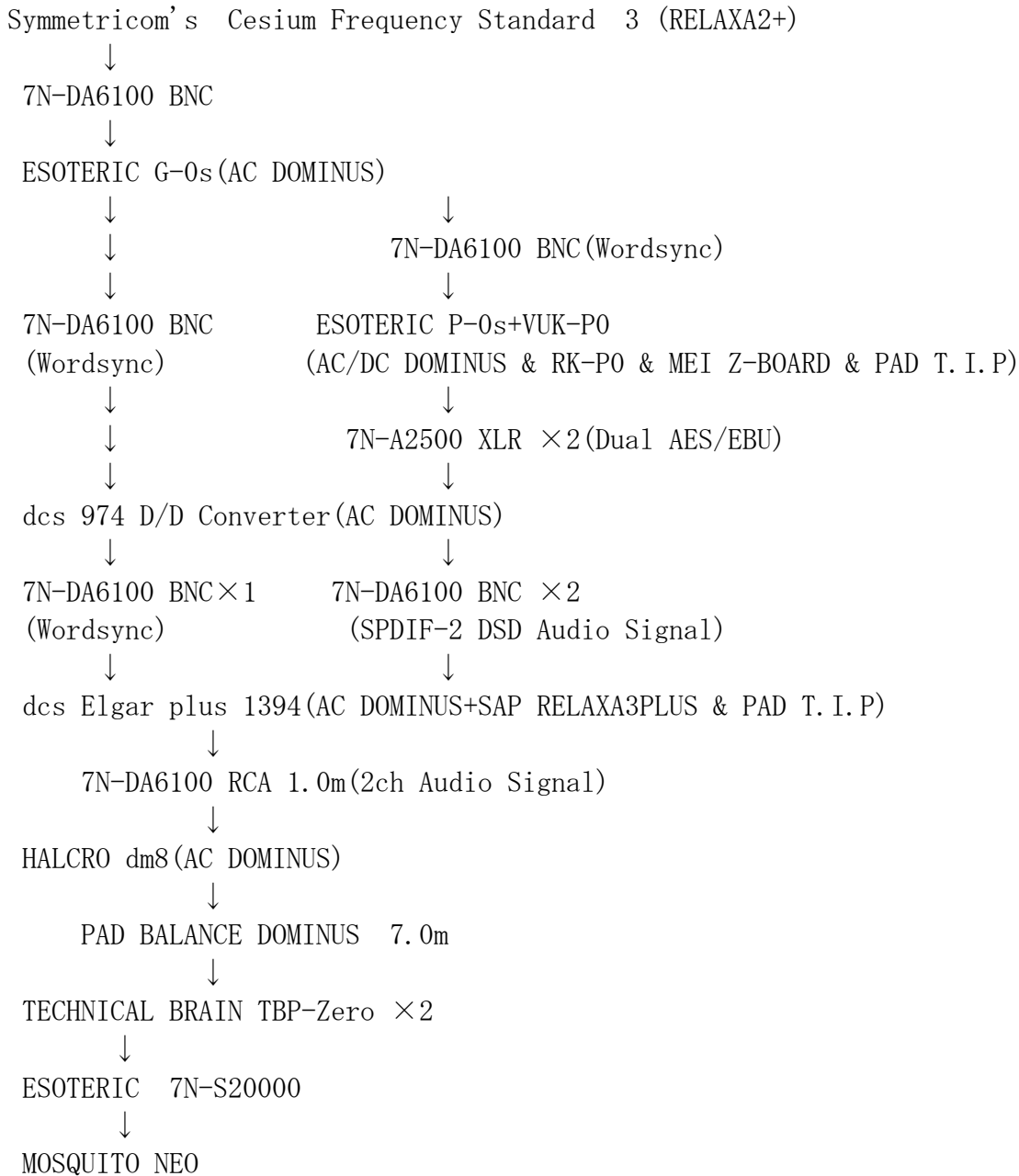
偏執狂というところまで自分を追い込むようなことはないし、ましてやオーディオと再生音楽についてミクロの視点を持ち過ぎることの弊害を承知しており、楽しむための音楽という見方をしている私だが、妥協した音質をここで出したくないというこだわりの気持ちには揺るぎがない。

そんな私の元に先週持ち込まれたのがこれ。

TECHNICAL BRAIN Monaural Power Amplifier TBP-Zero 税別¥2,800,000.

この作者である同社の黒沢直登氏は20年ほど前から存じ上げている方なのだが、このような作品を手がけていたとは知らなかった。ご自身では営業経験などなかった同氏が私を訪ねて来られた理由はここで述べるまでもないことだろう。根っからの技術者である黒沢氏の作品に対して私がハード的な解説をするなどおこがましいものであり、TBP-Zeroに関することは下記のサイトや技術系オーディオ専門誌をご覧頂ければと考えている。

さて、持ち込まれた当日は最近定番としてセッティングしている下記のシステムに組み込むことになった。



早速聴いてみたのがこれ。セミヨン・ビシュコフ指揮、パリ管弦楽団によるビゼー「アルルの女」
「カルメン」の両組曲である。(PHCP-5276 廃盤)弦楽器を中心としてオーケストラの各要素を満遍
なくちりばめた演奏で最近はこの聴くことで私は多くのことを知ることが出来るようになったも
のだ。

1. 前奏曲 「お～、電源投入直後なのに中々いいじゃないか!!」
8. ファランドール 「管楽器の豪快さと弦楽器群の質感がいいぞ!!」
10. アラゴネーズ 「打楽器のエコー感がホールでの位置関係を忠実に再現」

15. ハバネラ 「フォルテの開放感が気持ちいいな〜!!」

と、第一印象は設計者ご本人が同席されていてアンプも鳴らし始めたばかりというハンディキャップ? もあったが好感触であった。しかし、同社ではプリアンプは開発中ということで純正のペアはない。プロトモデルも持ち込まれたが上記の HALCRO の方が魅力的に感じられたものだった。

しかし…!?

24 時間通電を続けながら、二日後に時間を見つけて再度同様なシステムで聴き直すことにした。同じ曲を聴き始めたのだが、第一印象ほどの魅力が感じられない。

私は常々プリアンプとパワーアンプは同一の作者によるペアが最も本領を発揮するという信条を持っているものだが、その疑念が再び頭をもたげ始めたのである。過去にも同様にプリだけ、パワーアンプだけという単体を他社の製品と組み合わせたことは数え切れないほどの経験がある。

いずれか単体で最初持ち込まれたアンプを試聴し、どうしても不満がある場合には同メーカーのプリ、またはパワーアンプがあった場合には後日でも持ち込んで頂き再度同じアンプを同メーカーの組み合わせで聴くと私の不満が解消されるという経験が多々あったものだ。

しかし、今回の場合には同メーカーのプリがないということ的前提に評価しなければならない。

これはあくまでも私がこの試聴環境とシステム構成の中で検証し、私の感性による判定ということになるのだが、初日に組み合わせた HALCRO では既に違和感を感じ始めていたのである。そこで、上記システムでプリアンプのみを Brumester 808 MK5 に入れ替えたのである。しかし…!?

私はオーケストラの演奏で弦楽器の再現性がつつがなく行われることが第一条件であり、金管楽器や打楽器などの質感はその後の調整か、もしくは個性の選択という範囲でも受け入れできる要素として優先順位を先ずは弦楽器において仕上げていくことにしている。

これまでには HALCRO dm8 も Brumester 808 MK5 も、過去のシステム構成においては私が満足する質感をシステム全体にもたらしけてくれていたのだが、今回はどうしても納得がいかないのである。

このパリ管弦楽団の録音では弦楽器の各パートが幾層ものレイヤーとして同質の光沢感をもってしなやかに展開して欲しいものなのだが、残念ながら単体としては素晴らしいプリアンプであることを他の場面で実証してきた両者も今回は私の求める質感を出してはくれなかったのである。

これはもはや“個”の問題ではなかろう、と私は三日間の時間をおいて結論を下し、自分の記憶にあるコンポーネントの適合性を推測し大きくシステムを変更することにしたのである。

そう、弦楽器にこだわった。

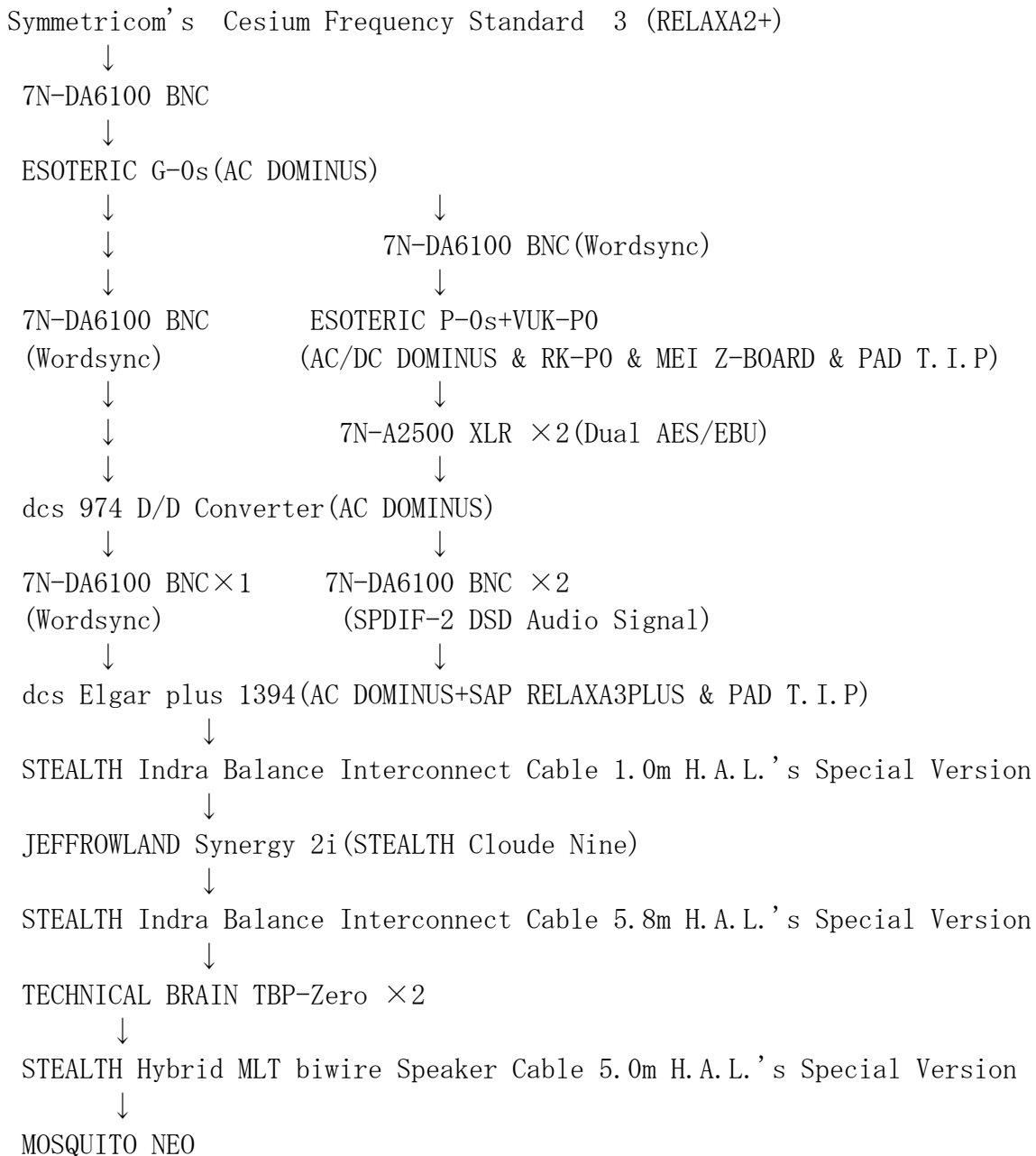
2. ケーブルはコンポーネントの一部である

私は持ち込まれた各社の作品を可能な限り追い込んで鳴らしてみたいと願っているもので、組み合わせの妙という意外性を何回も経験してきた。TBP-Zero という新入生に対しても同期のプリアンプがないからという理由だけで中途半端な結論は出したくない。

しかし、そこにはシステムのなかで噛み合う歯車として他の要素はないだろうか? と考え込んでいた私は第二のシステム構成としてケーブルの相性にも目を向けることにし、以前の経験から下記

の Short Essay で検証した STEALTH Audio Cables の美的余韻感を取り入れてみることにした。

--第二のリファレンスシステム-***-***-



--***-***-***-***-

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/278.html>

まず、Indra に関しては上記のブリーフニュースで詳細を述べているが、最大の特徴はアモルファス状態で直径 0.025mm の素線を 9 本をコアに仕込んでいるのが Indra であり、特徴は「Q ファクター」と呼ばれる要素である。同要素はケーブルの信号号伝送の際に生じるリンギングを防止する効果がある。リンギングとは急峻な変化をする信号が、回路網を通過した際に生じる波形を言い「ディストリビューテッド・リッツ」という無共振多層構造を採用している。今回はバランスケーブルでは二倍の 18 本が使用されている。

私は以前の試聴評価の好印象に加えて更なる可能性を追求するという事で STEALTH から提案があったのだが、直径 0.025mm の素線の本数を増加させることによって更に低域の再現性を向上できるので、これをオリジナル商品としてミスター・カワマタに提供しようということだったのである。

そして、届けられたのが 0.025mm の素線を 12 本組、バランスケーブルなので一つのケーブルには 24 本を組み込んだ、この Special Version の Indra であり、DYNAMICAUDIO05555 HI-END AUDIO LABORATORY とレタリングされてきたのである。これはうれしい!! 更にノーマル Indra に比べて多量のシールド、テフロンが施されており、プラグはチタニウム製で非常に堅牢である。

しかし、精度と音質にこだわる設計から私はここで使用する長さとして 7.0 メートルの Special Indra をお願いしていたのだが、製造上の限界から 5.8 メートルまでしか出来ないのでも許して欲しいというメールを頂いてしまった。

それはもちろん理解できるというか、0.025mm の髪の毛よりも細かいアモルファスの線を 5.8 メートルもの長さでより合わせてケーブルを作っていくのだから、逆に恐縮してしまうような手間ひまとなうハウに支えられていたことだろう。

これでプリとパワーアンプの接続は出来るが、プリアンプへの入力はどうするのか? という事まで気を使って頂き、一昨日 Special Indra の 1.0 メートルも到着したのであった。これでシグナルパスを Special Indra で統一できるぞ!!

次にスピーカーケーブルであるが、Hybrid MLT biwire Speaker Cable ということで、これもオリジナル商品として提供されたものだ。どこが違うのか?

まず、この Hybrid MLT が非常にユニークなところは、シングルワイヤーの場合には“Low”専用ケーブルが 2 本、“High”専用ケーブルが 2 本の計 4 本が 1 セットになって販売されるということなのである。

つまり、片チャンネルのスピーカーには“Low”と“High”の各々をプラスマイナスに接続して使用せよ、ということなのである。そして、“Low”をスピーカーの入力端子のプラス側にするかマイナス側にするのかはユーザーの好みで、“High”も同様にどちらに接続するかをユーザーに任せて好みで使って欲しいということなのである。ちなみに、私は biwire で依頼したらこれの二倍、つまり左右で 8 本、“Low”と“High”が各々 4 本ずつ納品されてきたのである。さあ、この使いこなしも課題の一つになってしまった(^_^)

これについて輸入元の見解は次のように伝えられている。

接続方法には以下に示す 3 通りがある (バイ・アンピ、バイ・ワイヤーの場合)

1. Left と Right のスピーカーへそれぞれ 2 本の“High”を mid/high セクションへ。
“Low”を bass ドライバーへ接続します。音質の傾向はより臨場感が得られます。
2. Left と Right のスピーカーへそれぞれ 2 本の“Low”を mid/high セクションへ。
“High”を bass へ接続します。音質は bass にスピードが増し、深いサンドステージと全体感が柔らかくなります。

3. Left と Right のスピーカーへそれぞれ1本の“High”と1本の“Low”をbassに使用し、1本の“High”と1本の“Low”をmid/highセクションに繋げます。結果スピーカーのmid/highとbassセクションが明かな“Even”(同一特性)を引き出します。

次に、内部の構造なのだが、最小単位としての素線は Indra 同様に極めて細いワイヤーであり、それも同様にテフロンで一本ずつを絶縁している。ポイントはこの素線の素材なのだが、純度99.997%の純金、純銀、OFCの導体を使用している。三次元43層絶縁TATCマルチゲージ構造というのは、この三種類の素線のある単位にまとめられたものをより合わせているということであり、各素材のケーブルが多数使用されているということだ。

さて、それでは Special Version と何か? ということなのだが、上記のように三種類の素材の素線が組み込まれているのだが、特別に「Fine Tuning」されており“High”の金と銀が25%増量されており、“Low”の銅が30%増量になっているという。

最後に価格なのだが、次のような対比となる。

通常の Indra は下記のように仕様によって異なるのだが1.0mとして示すと…

Indra Amorphous Alloy RCA WBT 0110Ag	税別¥748,000.
Indra Amorphous Alloy XLR Furutech FP-600 Rh	税別¥975,000.

これに対してプラグも特別仕様となり

Indra Balance Interconnect Cable 1.0m H.A.L.'s Special Version
税別¥1,268,000. という価格になるものだ。ここに来ているのは5.8mなのだが、これだと¥3,936,800(Stealth Rh)という価格になる。

次にスピーカーケーブルだが、3.0mとしてシングルワイヤーでは New Generation Hybrid MLT Stealth Spade Ag はステルスオリジナルのスペードプラグを使用しており純ソリッドシルバーを採用し、優れた絶縁特性を持つ音質プラグを使用している。税別¥403,000.

それに対して

Hybrid MLT Speaker Cable 3.0m H.A.L.'s Special Version
税別¥557,000(WBT0660Ag)という価格になるものだ。

これがbiwire仕様になると税別¥999,000. という価格になる。ちなみに、ここに来ているのは5.0mのbiwireなので税別¥1,711,000.(WBT0660Ag)となる。

最近のニュースとして Stealth Indra が「2004 Most Wanted Components」を受賞しニューヨーク STEREO TIMES 誌の記事として一報が入っている。

<http://www.stereotimes.com/MWC0511044.shtm>

さあ、これらのケーブルを接続し PAD のシステムエンハンサーを一晩かけて明日の試聴に望もうということになった。二機種の高価なプリアンプをやめて JEFFROWLAND Synergy 2i を採用したこと

も含めて明日はどのような演奏を聞かせてくれるのだろうか!?

3. 興奮のリニューアル

まず、私が最初にこだわったのは Hybrid MLT Speaker Cable の使いこなしである。“NEO”はシングルワイヤーでの接続なので、この場合にはバイワイヤーの両チャンネルで8本というケーブルをすべて使う必要はないのであるが、根が貧乏性の私(笑)なので、もったいないと思いついて上記の“Low”と“High”のケーブル二本をアンプとスピーカーのバイディングポストひとつに何とか接続して聴いてみようと思ったのである。

PAD DOMINUS のスピーカーケーブルは、プラスとマイナスでは導体の構造と合金の配合も違うということは承知しているものだが、あからさまに“Low”“High”とケーブルに表記されていると低音専用? 高音専用? のように見えてしまって精神的に落ち着かない。ましてやスピーカーのプラスとマイナスの各々に“Low”“High”を一本ずつ使うというやり方にはなじみがない。

であれば、スピーカーのプラス、マイナスともに“Low”“High”をダブルで接続してしまえば文句はなかろう!!(笑)と思いついたものだ。その後に残された組み合わせは二通りである。それは、スピーカーとパワーアンプの接続でプラスに“Low”をつなぐかマイナスに“Low”をつなぐかということである。“High”は当然その都度逆になるわけだ。この3パターンを聴き比べたのである。

もったいないから…、ということで一つのターミナルにダブルで接続した場合が真っ先に選択肢から外れた。一見弦楽器がふくよかに感じられるのだが、音量を上げていくとごくわずかだがフォーカスのにじみが感じられる。

次に、プラスに“Low” マイナスに“High”、そしてその逆。う〜ん、これは難しい…。しかし、確実に言えることは前回のダブルでの接続よりも音像がすっきりしていてフォーカスのイメージが整っていることだ。やはりシングルワイヤーではこのどちらかでいくべきだろう。“Low”“High”の接続を三回やり直し、極めて微妙ながら楽音の質感を聴きとって私が選択した接続法は…!?

今回のシステムにおいて、という条件付だが私が選択したのはマイナスに“Low” プラスに“High”という組み合わせであった。これがいい!!

さあ、これでいよいよ本格的に心置きなく試聴できる下地が出来た。さて…!?

これまでに引っかかっていた課題曲、セミヨン・ビシュコフ指揮、パリ管弦楽団によるビゼー「アルルの女」「カルメン」(PHCP-5276)を早速かけてみた。

[1]前奏曲 「こっ、これは!!」

導入部の弦楽器群による重厚なアルコの合奏のいきなりの変貌にわが耳を疑った。

私がこのディスクの中でも特に好きなパートであるが、この時の弦楽器が幾層にもレイヤーを構成して左右の“NEO”の更に両翼の周辺部までも広がり、その質感にほのかな甘みを感じさせてくれるのがたまらない。思わずイメージしたのは、あのミルフィーユであった(笑)ちょっとした雑学だが調べたところでは。

< millefeuille > 薄い生地が何層にも重なったパイ菓子。

日本では銀座マキシム・ド・パリの「ナポレオン・パイ」が有名。日本ではミルフィーユとして売られていますが、正確にはミルフィユ<millefeuille>と言います。ミルとは「千」、フィユとは「葉」、つまり「千枚の葉っぱ」という意味です。何層にも折り重なるパイ生地（実際にパイ生地という単語はなくフィユタージュと言います）を焼くと葉っぱが重なったようだとするところからこの名前が付けられました。製菓職人のルージェが作ったと言います。

ちなみにミルフィーユとミルフィユ、フランス語だと全く違う意味になってしまいます。ミルフィーユは「一千人の娘さん」という意味になるのです。正しい発音はミルフィユなのです。

この解説を読むまでもなく、甘党の皆様はどうにご存知の菓子なのだが、先日のように TBP-Zero を使い込んでいく過程で私が不満としていたことが見事に解消し、本当にドライブ能力のあるアンプとは、打撃音のようなものをカツカツ、バンバンと鳴らして驚くのではなく、楽音の本来あるべきしなやかさを再現したときに真の実力が問われるものだということが今ここで実証されたようだ。

弦楽器群の多数のアルコの繰り返しの中で大変微妙だがわずかに舌にざらっとする感触を覚えたものだが、この時の演奏は大違いだ。

視覚的にはまさに「千枚の葉っぱ」のごとく一本一本のヴァイオリンが重なり合った縞模様が鮮明に見えるようであり、その一つずつの層の間に塗り込められたクリームがえもいわれぬ口溶けのまるやかさで絶妙な甘さに至福のひと時を得た思いである。これは初めての体験である!! 美味しい!! こんな“NEO”があったとは!!

そうだ、“NEO”の輸入元のエリック氏はフランスの人なのでこの例えがわかってくれれば良いのだが…(^_^でも私は「一千人の娘さん」の方が好きだな～(大爆笑)

冗談はこの辺にして…^_^;

[8]ファラドール 「Shout bravo!!」

この演奏が終わったときの正直な私の感動である!! 前奏曲と同じ主題を管楽器を交えて始まり、やがてタンバリンと小太鼓がステージ奥でリズムを刻み始める。最初から豊潤な余韻感がオーケストラ全体に潤いを与えながら、リズム楽器の鮮明さが対照的に歯切れいい。

やがてフルートが中央で絶妙なタンギングを披露するとストリングスもピッチカートで応え始める。このピッチカートの最初は点としての音源からふわ～、とホールに響き渡る余韻感が聴きどころであり、まさに私の記憶に焼きついているSTEALTHの最も印象的な魅力であることを思い出した。

終盤に差し掛かると弦楽器群のアルコがうねるように展開し、ことさらハイスピードな“NEO”の低域再生に TBP-Zero が抜群のサポートをかける。これはいい!!

滑らかさと歯切れよさの同居する演奏はプリアンプの選択にも関与している。私が採用した Synergy 2i が見事に私の期待に応えてくれた。今はなき Coherence は現役時代にはプリアンプを苦手とする数社のパワーアンプに対して絶妙のコントロールを発揮してくれたものだが、このような剛性と柔軟性の両者を同時に求めたいときには得がたい脇役?(失礼) となってくれるのである。

この選択はヒットである!! ビンゴ!!

[10]アラゴネーズ 「これはパワーアンプの勝利だ!!」

最後に盛り上がるファランドールとは対照的に豪快なスタートから始まり、最終部は静かに消えていく編曲である。リズムカルな導入部から始まり、ここではオーボエのソロが“NEO”の中央に立ち上がり、それをフルートとピッコロ、クラリネットらの木管が取り囲むように展開していく。

そして、ここでもストリングスはピッチカートの余韻を響かせてステージを包み込む。この弦楽器がピッチカートから時折アルコに転ずる時の音色が何とも美しいことか!! そうです!!

私はこれを求めていたのだ。

[15]ハバネラ 「低域が引き締まっていると余韻感が引き立つ!!」

Synergy 2i のボリュームのカウンターはフルで 63.5 という数値になる。

刺激成分がなく爽快に聴き進むなかで、私はここぞというところで 58.0 までボリュームを上げた。

左右の弦楽器群の掛け合いでお馴染みの旋律が繰り返され、その中央ではタンバリンと木管にピンスポットを当てたようにくっきりと浮かび上がる。

この一瞬のために待ち構えていたオーケストラが一斉にフォルテを放ったときの爽快感!! そして、ここで見られることは中高域の余韻感は誰しも気が付くところなのだが、低域のエコー感が鮮明に聴き取れるという驚きである。

“NEO”の低域のスピード感によって、その低い周波数帯域でのエコー感の分離と再現性に優れていることは先刻述べているものだが、逆に言えば低域の反応が遅いアンプでは本質がばれてしまうものだ。そして、情報量としての余韻感を伝えるべきケーブルがプアーであると同様にエコーは分離しない。この三者のコラボレートが私に新しい“NEO”の可能性を見せてくれたのである。

4. パワーアンプの貢献

私は今回のシステムをオーケストラの弦楽器の再現性を私の求めるレベルでということ構成してきたのだが、またそこだけで終わるものではない。

押尾コータロー 『STARTING POINT』 6. Merry Christmas Mr. Lawrence
<http://www.toshiba-emi.co.jp/oshio/>

「おー!! 素晴らしい!! 合格~!!」

「Muse」からフィリップ・ジョルダーノ 1. ハバネラ
http://www.universal-music.co.jp/classics/healing_menu.html

「文句なし、合格!!」

大貫妙子の“attraction” 5トラック「四季」

http://www.toshiba-emi.co.jp/onuki/disco/index_j.htm

「思わず涙!! 当然合格!!」

私の課題曲のどれをとってみても文句の付けようがない。弦楽器という連続する楽音、そして楽器の数が最も多いという編成の規模に対する解像度の必要性。これらを私が求めるレベルで再構成したシステムは見事に私の要求に応じてくれた。いや、おつりがくるくらいの素晴らしさなのだ。

これらの余韻感と質感の両立を果たしながら、うるわしい弦楽器を再現させるという仕事にはSTEALTHというケーブルの存在を私は色濃く感じていた。

しかし…、私にはプリアンプとパワーアンプの相性という確認事項をケーブルの更新ということも含めて解答を出したわけだが、その当初の目的にはTBP-Zeroの個体としての能力をチェックすることが実験の動機であったものだ。

そこで、私はこれまでのような弦楽器、声楽のように流れるような演奏の連続ではなく、ニュートラルなスピーカーであればあるほど問われるパルシブな応答性でパワーアンプのパフォーマンスを確認しようと考えたのである。

それには…、この曲がふさわしい。Audio labの「THE DIALOGUE」から

(1) WITH BASS を集中して聴くことにした。さて、どうなるか?

http://www.octavia.co.jp/shouhin/audio_lab.htm

Synergy 2iのボリュームは遂に62.0まで引き上げられてスタートした。

「おおー!! これは…!?!」

出だしのスネアのショットで面食らった。破碎音という例えではデリカシーにかけるかもしれないが、少なくとも弾性のあるドラムヘッドを叩くと言うよりは、無反発の打面をヒットするところなるのでは、というくらいに鋭い一打が叩きだされた。

続くキックドラムには以前にも増してハイスピードながら重量感が備わっている。この曲は他のスピーカーではキックの打音が床の上を這ってくるように周辺に拡散してしまうことが多いのだが、“NEO”の大きな特徴としてスピーカーの中ほどの高さにある中空に忽然とキックドラムが表れるものだ。

しかし、TBP-Zeroによって駆動された“NEO”のウーファーは、それ自身が600Hzまでを受け持っているという比較的広い受け持ち帯域による負担をこともなげに解消してしまい、反応としては軽々と、そして質感としては圧縮されたエネルギーを一気に放射するように、目の前で手を叩くような切れ味の良さで連打続けるのである。もちろん息切れの兆候は微塵もない。

ウーファーの駆動は電流で、というスピーカー側から見た常識に対して、強力な電源部がその容量の大きさだけでなく給電スピードの速さによって破綻しない低域の打音の再生を行えることは私も体験済みだが、重量20Kgという大型トランスが見せる反応としては私の記憶にもないくらいのテンションを再現する。これは見事だ!!

4パラ出力段のエミッター抵抗を取り去り、すべてのシグナルパスから保護リレーやチョークコイルなどの機械的接点をも取り去り、完全フルバランス構成 BTL という回路でノイズフロアの低減とハイパワーを両立させた。

もちろん保護回路はホール素子をシグナルパスの外部にセンサーとして設定し、入出力の波形観測を高速で行うことによりメイン電源のブレーカーを落とし、同時に出力段の電源コンデンサーを高速放電させるという新機構で万全の対策を施すという巧妙なテクニックで音質に影響のないプロテクションを実現している。

過去の経験から私の求めた音量ではパワーアンプの出力はピークで600Wを超えることも多々あり、ミニマム・インピーダンスは150Hzで4オームという“NEO”での再生ではパワーアンプには過酷な条件であるはずだ。

前述しているが、通奏楽音のやわらかさ滑らかさを高い次元で実現しているものは真のハイスピードアンプといえるものだ。生半可なアンプでは解像度を落とした曖昧な表現で弦楽器を懐柔したようなファジーな音質でごまかしても、ドラムをハイパワーで鳴らすと刺激成分が混入してくるものなのだが、TBP-Zeroではリスナーにボリュームをもっと上げろと挑戦してくるような混濁のない打音の連続を軽々と展開する。聴きやすい打音であると自然とボリュームが上がってしまうが、スピーカーがNoというまでは使い手の要求にこれでもかと応えてくれる制動感の素晴らしさがある。

TBP-Zeroは外気温よりわずかに18度高いだけという抜群の温度管理と効率の素晴らしさでこれらを実現したという。

「柔と剛の両立!! これは恐ろしいアンプが登場したものだ!!」

オーケストラの流麗な演奏と迫真のドラム、相反する演目に対するTBP-Zeroの貢献度は今回のシステムで確実に証明された。私は興奮と感動で満腹状態になってしまったが、アンプに関して何らかの食い足りないという欲求不満をお持ちの方にこそ、ぜひTBP-Zeroの試食をお勧めするものである。

第四章「トゥイーターの構造と新たなエピソード!!」

1. 支持率100%の更新が続く

まず、本日確認が出来た事実なのだが、話題沸騰の“NEO”を展示しているショップは何と世界中でも三箇所しかないという。フランスはパリの市内のショップが一店、ドイツ国内のショップが一店、そして、ここH.A.L.である。このように世界中でも選ばれ限られたショップでしか扱っていないものなのだ。

さて、本日は何と、あのスピーカー!?

EgglestonWorks ANDRAのオーナーが試聴に訪れたのである。

<http://www.egglestonworks.com/>

私の随筆でも下記のように述べているが…!?

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/oto/oto35.html>

1996年4月19日、その予感は私にとって大きな驚きと感動に変わるのである。
この全く無名のスピーカー・マニファクチャラーは、一体どんな歴史を持っているのだろうか。

1976年、ニューヨークの現代美術館で写真家ウィリアム・エグレストンの個展が開催された。
この美術館でカラー写真の個展が開催されたのは開館以来初めての事で、広告、報道、商業写真などのレベルから彼の写真はこの分野を一気に芸術の域にまで引き上げたのである。

その息子であるウィリアム・エグレストン三世は、過去15年間携わってきたスピーカー設計の経験によって、父と同様の貢献をオーディオの世界において成し遂げた人物として評価されている。

その大胆なスピーカーデザインは、「オーディオ/ビデオ・インテリア」誌において、エグレストンワークスのスピーカーほどスタイルとテクノロジーを調和融合させた事例はないと評している。

エグレストン三世は父親に教わりながら、実に8歳のころからスピーカー設計を始めている。父親が三世にいつも言い聞かせていたのは、「ピアノを聴け。そして、スピーカーを聴け。」という言葉であった。

ある時、彼がリビングルームに入っていくと、父親のスピーカーから流れ出ていたピアノの音は、実際そこにピアノがあると思わせるほどリアルであったという。以来、彼はスピーカーの音楽的精度を左右するのは中域ユニットに他ならないと実感し、今日まで中域の再現性を中心にオーディオ再生の真実を求めてきた。

その過程でデザインに対する鋭い感性を生かしながら、自らの理論を具現化するキャビネットのアート&クラフトにも習熟していったのである。こうして、満足すべき成果が上がった1992年テネシー州メンフィスにおいて、彼は10名のスタッフと共にエグレストン・ワークス・スピーカー・カンパニーを設立したのである。

-*-*-*-*-*-*-*-*-*-

このように“NEO”と同じMORELのユニットを使用したANDRAはピアノの再生に重きをおいた設計として当時の私を唸らせ、かつ日本でも多数のオーナーに迎えられたわけだが、この日も私はANDRAのオーナーに対してピアノの演奏をお試し頂いた。

「弦楽器の質感が素晴らしい上にピアノのリアルさには驚きました!!」

とオーナーからも感動の一言を頂戴し、8年ぶりにスピーカーの入れ替えを検討しようという決意表明を頂いたものだった。すべての音楽ジャンルのユーザーに対してまさに支持率100%という記録は現在も続いているものです。

さて、ピアノよし、弦楽器よし、ヴォーカルよし、ドラムやパーカッションよし、という“NEO”のパフォーマンスの素晴らしさだが、ウッドレス・スピーカーを作りたかったというMOSQUITOの開発者たちの狙いが見事に結実したものなのだろう。

木材を使った楽器たちを“NEO”がここまでナチュラルに演奏する秘訣はなんだろうかと私も考えてみた。

2. キーテクノロジー

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/brn/280.html>

私は、このショートエッセイの2. “NEO” Physical feature の中で次のように述べている。

フロントメインバッフルは厚さ 20mm の無垢のアルミからの削り出しである。
その上部にサブバッフルが同様の厚さで削り出され 8 本のビスで強固に取り付けられている。

トップに位置するトゥイーターはそれとは全く逆にフローティングされており、指でフレームを押してみるとダンパーを介してふわふわと動き浮いているのがわかる。これは賢い設計である。

—*—*—*—*—*—*—*—*—*—

ドラムのような強烈なアタック、ギターやピアノのようにインパルス信号に近い高速の立ち上がり。しかも、それらの再生音に刺激成分、歪み感がないという“NEO”の音質で、ベースコントロールということで解説しているが、低域のスピード感と解像度を両立させるという技術的なノウハウの資料がカタログベースであったので理解しやすかったものだ。

しかし、“NEO”の大きな特徴である弦楽器の再現性については、やはりトゥイーターとミッドレンジが決め手であろう。これについて私は両ユニットをどのようにバッフルに固定しているのかという質問を、正確に言えばどのようにしてフローティングさせているのかということをお願いしたのである。

そうしたら、何と MOSQUITO の社内でわざわざトゥイーターをアッセンブルする過程を撮影して送ってくれたのである。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/040519/1.jpg>



まず、これは独立したキャビティを持つトゥイーターの構成部品である。左上のユニット本体と右側のカップ、それにフローティングに使用する特殊なダンピング素材であるアメリカのデフレックス社が開発した DEFLEX が下の黒い帯状になっているものである。

しかし、敷物にダンボールではなくて、もう少し体裁の良いものを敷いて撮影してくれればよかったのに…(笑) と贅沢な感想を一言(^_^)

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/040519/2.jpg>



次にこの画像でトゥイーター後方のカップの肉厚感を見ていただきたい。当然これは“NEO”のために無垢のステンレスを削り出したものであり、これ自体が相当な剛性を持っているのはいうまでもない。このトゥイーターはフランスの Audax 社のものだが、それはこの画像で見られるユニット本体の後ろが黒いフレームになっている部分までであり、その外周のハウジングは MOSQUITO が作成したものにマウントしているのである。

そのハウジングの外周に肉厚な突起が周回しているのがお解りだろうか？

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/040519/3.jpg>



トゥイーターのハウジングの外周の突起部はなぜ必要なのか？ それはこの画像を見るとわかってくる。断面がU字型の DEFLEX を、これに挟み込むように巻きつけていくのである。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/040519/4.jpg>



DEFLEX で外周をすっぽりと覆われたトゥイーター・ハウジングを削り出したカップにはめ込んだのがこの画像だ。つまり、トゥイーターのマウントには一切のビスやナットは使用せずに、最先端のダンピング材を介してただはめ込んでいるだけで機械的に完全にフローティングしているのである。

私は、大体ここまでは想像していたのだから、これほど様々な楽器に対して万能な対応力を持っている“NEO”は果たしてトゥイーターのみの貢献で成り立っているのだろうか？ と考えていたものだ。そして、いよいよトゥイーターをサブ・バッフルにはめ込んだのが次の画像である。

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/pho/040519/5.jpg>



このようにトゥイーターを納めたカップをサブ・バッフル後方からはめ込み、削り出しのカップの外周がサブ・バッフルときっちりと接合して小さなビスをサブ・バッフルの頭から一本ねじ込んで脱落しないように固定しているのである。サブ・バッフルの左端にそのビス穴が見られる。

さて、この画像でサブ・バッフルの右側にミッドレンジが搭載される穴が見られるが、勘違いしてならないのは、その穴の周辺にすべては写っていないのだが合計8箇所のネジ穴はミッドレンジ・ユニットを固定するためのものではなく、サブ・バッフルをメインバッフルに固定するためのものであると

いうことだ。さて、それでは一体ミッドレンジ・ユニットをどのような方法で取り付けしているのだろうか？

先ほどの画像ではちょっと解りにくいのだが、サブ・バッフルのミッドレンジドライバーが位置する穴の外周なのだが、滑らかなスロープで縁取りを丸く削り落としているが、そりカーブはサブ・バッフルの肉厚の半分までしかなく、残り半分は後ろから見て一回り大きな直径で切り取られているのである。つまり、サブ・バッフルをメインバッフルにあてがうとミッドレンジ・ユニットのフレームの外周がすっぽりはまり込む空洞ができる仕掛けになっているのだ。

そして、上記のトゥイーターと同じように MOREL-UK から供給される 14cmDPC コーン型ミッドレンジドライバーのフレームの外周にも DEFLEX を同様にはめ込むように巻きつけて、二枚のバッフルの間に出来た空洞にフローティングして納めるのである。

現在は当社も MOREL のスピーカーシステムをオリジナル商品として独占販売しているが、ユニットの製造元である MOREL でさえも、そして前述の ANDRA でさえも、このようなフローティング構造でのユニット取り付けはしていないものだ。

もしも、従来のようにトゥイーターとミッドレンジを金属のバッフルにビスを使って強固に固定したら、さぞかしキンキンとした音になったことだろう。このミッドレンジとトゥイーターの連係が“NEO”の魅力の大きな部分を担っていると考えている。

低域のコントロールは強靱なボディーに対して絶えず25キロという応力をかけてウーファーユニットをメインバッフルに向けて圧力を加え続ける。もちろん、ボディーそのものの設計もあるのだが、低域のより良い再生には剛性を高めるユニットの装着法を編み出した。逆に楽音の質感を支えるミッドレンジとトゥイーターはキャビネットに対して機械的なつながりを持たないようにアイソレーションするという巧みな装着法も同様に同社が編み出したものだ。

世界中のハイエンドと言われるスピーカーを長年に渡り多数扱ってきたが、スピーカーを各論で考えずに総論で取りまとめたいった MOSQUITO の熱意と斬新なアイデアには拍手を送りたいものだ。

いや、私も…、そして多数のお客様も既に“NEO”に対しては盛大な拍手を送っていたのだった!!

第五章 「“ NEO ” のプライスの本当のところをお知らせ致します!!」

2004. 6. 4 配信の No. 0930 にて紹介いたしました “NEO” H. A. L. ’s Hearing Report の中で、投稿して頂いた H 様が次のように述べていらっしやいました。

「しかも現地価格は 12,900 ユーロ / 1 本とホームページに出ているではありませんか。
ユーロ高ですからねえ、現地価格を 1 ユーロ 140 円設定でもペアで 360 万円。」

この計算に早速輸入元の社長から本日チェックが入りました(^_^)

<http://www.mosquito-groupe.com/englishversion/base.html>

確かに web には 12,900 ユーロとありますが…、よくよく読みますと…!?

Retailed price : from 12,900E per unit depending on finish

とありまして、要は仕上げによって 12,900 ユーロからあります、ということらしいのです。
そして、私も始めて知りましたが、実は NEO には弟分がいたのです!!

Neo Laque 仕上げというモデルがあり、前面は同じですが独特の曲線でデザインされた本体がラッカー塗装仕上げのモデルがあるというのです。しかし、その仕上げが今ひとつ高級感がないということで、これまでご紹介してきたカーボン仕様を日本で輸入することになったものでした。

このラッカー仕上げが一台 12,900 ユーロなのです。従って、Neo Carbon は現地フランスでの価格はセットで 29,000. ユーロとなっており、これを 140 円で計算すると ¥4,060,000. となります。

私も、どうして税別定価が 405 万円という半端な価格なんだろうと思っていましたが、オーディオ専門の輸入元ではないということもあり単純に地元フランスと同じプライスを付けたということだったのです!!

しかし、私は既に税込みで 400 万円ちょうどという販売価格を公表してしまいましたので…、ちょっぴり後悔してます～。^_^; フランスと同じように税別 406 万円に近い価格で販売しても問題はなかったわけですから…!?

と、ということでカーボン・フィニッシュの NEO の正確な現地価格を念のために皆様にお知らせしました。こちらの方がお安いですよ～(^_^) 皆様のご注文お待ちしております～<m()m>

ダイナミックオーディオ 5555

7F Hi-End Audio Laboratory

店長 川又利明

<mailto:kawamata@dynamicaudio.co.jp>

tel 03-3253-5555 fax 03-3253-5556

* My regular holiday is Thursday *